尼為ニ物語

141
95
1

天文十七　助久写　古写本

刀水書屋

酒竹文庫

亭子院乃みかといまはおりゐ給ひなんとするころ
弘徽殿のかへに伊勢乃御のかきつけゝる哥
わかるれとあひもをしまぬもゝしきを
みさらむことのなにかかなしき
とあるを帝御らんしてそのかたはらに
にかき付させ給ひける
身ひとつにあらぬはかりをおしなへて
ゆきめくりてもなとか見さらむ
となむありける
帝おりゐ給ひて又のとしの秋御くしおろし
給ひて所々山ふみし給ひておこなひ給ひけり
備前のせうにてたちはなのよしとしといひける
人内におはしましける時殿上にさふらひける
御くしおろし給ひけれはやかてみくしおろしてけり
人にもしられ給はてありき給ひける御ともに
これなむおくれたてまつらてさふらひける
かゝる御ありきし給ふいとあしき事なりとて内より
少将中将これかれさふらへとてたてまつれ給ひけれと
たかひつゝありき給ふいつみの国にいたり給ひて
日根といふ所におはします夜ありいと心ほそう
かすかにておはします事を思ひつゝいとかなしかりけり

かなしかりけりさて日根といふことを哥によめと仰ごと
ありけれはこのよしとし大とく

ふるさとのたひねの夢にみえつるは
うらみやすらむまたとゝはねは

とありけるにみな人なきてえよまずなりに
けりその名をなん寛蓮大とこといひてのちまで
さふらひける

故源大納言宰相におはしける時京極のみやすところ
亭子院の御賀つかうまつりたまふとてかゝる
事なんせんと思ふさゝけもの一えた

せさせてたまへと聞えたまひけれはひけこをあまたせ
させ給ふてとしこにいろ〳〵にそめさせ給ふ
しきものおりものともいろ〳〵にそめよろつの物きよらに
何かとみなあはれにしをきせ給ふしいたらぬ
ことは九月つこもりになんありけるをかくて
その十月しくれのふる月比もかはらぬほと哥
人のもとにきこえたまひける

ちゝのいろにいそきし秋はすきにけり
今はしくれになにをそめまし

これはあいなきことの好事ともはいはれもたまへる

うれしきもいひつゝ於なるおほきよりはちはいかれ
未とものさうあそびきこえこともいとよし忠の
給ことゝりになむになれは
こゝ未けのよろしきの御ししらなきに
涙をことさらのこえたましいとかは涙きを
こなんいへらなん涙とこそもてしとをさてしつしこえに
なりきえしまさるを見いつゝまや物の人をしるひれ
きまをいはにたゆきこえたる武家にあれ字涙
とおもひて
青柳のいとよりかくるものゝなれ

なる涙日ころもこぼしおほしいかでけれ
まゐりたりし千尋の風ありたまへりなれは物にかくれて
のちの僧とくたりんつてけり
帥大貳とゝをとつさを見の国ようての使をは遣る
ておほとんぞてかなきおほやけりもはうりまる
四位よもたりへぞうてにあらぬなきいゝたさ
うかぎ懐らりの朱いと極てうなかれと京
とうくそゝ人もおさくあるある人へとこへと四位よ
なりたりとも此れいる人の涙もあるをとなさけしつ
昔ある朱いとしとんと四てやらに京武のあとわある

に近江守公忠のきみの文をなむもてきたるいと
ゆかしううれしうてあけてみれはよろつの
ことゝもかきもていきて月日なとかきておくのかた
にかくなん

たまくしけ二とせあはぬ君か身を
　あけなからやはあらむとおもひし

これをみてなむかきりなくかなしくてなきける
四位にならぬよしふみのことはにはなくてたゝ
かくなむありける

前坊の君うせ給ひにけれは大輔かきりなく
かなしくのみおほゆるに后の宮后にたち給ふ
日になりけれはゆゝしとてかくしけりさりけれは
よみていたしける

わひぬれはいまはとものをおもへとも
　心ににぬはなみたなりけり

あさたゝの中将人の女にてありける人にしのひて
あひわたりけるを女もおもひかはしてすみけるほと
にこの男人の国のかみになりてくたりけれは
これもかれもいとあはれとおもひけりさてよみて
やりける

おもへる恋歌はるゝつましく井なといふにして
ちりたりきさくらに寄てちる歌
とみんかゝる人の歌目いひ恋ある事也
男女あひみえてとりしつはいまちをいさこつたかるゝと
にもえてちれもちに事は花とあくしとたえてせこ
ひしつらやまき有男も哀と思ひなからうらみん
いひこをけ也
あふ事はゆ情ありこつ頼りと松と思ひと
たまらしもなたえぬともまよりあゆら人也
女かたとあつめもこ相すりり恋まり

盛乃むすめのもとに中務宮おとろし侍しかたらひ給
なとにと方すゝぬこつれなくこらしいひんたかきまゐけつゝ
このう情つれなき恋いひもはゆ侍すま
逢事はつらいまき侍のこゝに娘こつして侍
いまよみうらり侍こ人とおもとわるへき
となりある時は方娘ころれおろりなり時とおもふし
侍してうみたけるのおもたるに恋の果くらして又い
さしくらきともしありいさありけ也まさつ院まさつら
すまくしたか手はいさらしくもけりもこ物ともしまさ
里の歌めつにおはしつたく思はるんたりとなりし侍

ありけるの返し

たはさいけ池の水藻おもへるゑふとも
あまにうつる花をわすれさりしを
ゆゑしいたゝ我やみなきんへへ侍しけれ
とありける兵部卿の宮うせ給て御はての九月
つこもりになりけるに給ひ北の方にて
ありけるにたてまつりける
おほかたの秋のはてたにかなしきに
けふはいかてか君くらすらむ返し
うきことも思ひしらすにはかなくて

へりさらにまくは思ひけるかな
あふことをなからのはしのなからへて
こひわたるまにとしそへにける
となむありける給ひける
監の命婦かくあはれなりけるに人にてもて
堤あるところにすみけるをとこのもとに
まへたりけるをはしりけれはかくなむ
命婦にもとのところにすみわたりけれは
ふるさとをわすれしむかしを思ひ出つゝ
故源大納言の君忠房のぬしの御むすめ東の方

けふらしとおもひて思ひて深くいひける所なむと亭
子院のみかとにつきたまへりけるにあつかりて
子とものとありけるにまた子ともまうけたりけるに
いふかひなきをすこしまさりていへるこゝろなる
なりける
ときはの江の松たかきなみにはさしけるを
ことのはを夜のたちまちつれ
となむよみける
はなはしくいはねはなほこそ深き江の
まつやまてしはるかはるのみ
となむありける
おなしころこの世にやとふみける所にゆきあひてみつゝ
あはせてもとつかへりけるおとこはきたのかたの宮に
ものくるしかりけるをしりて
ゆくといひしなみたつゝみせむよのよは
ゆきかへりやまことなくなみ涙のこゝろ月なき
むかし藤原のちかぬといふ人のめにいまこ
といふ人なむありけり女子をもなむもたりけるに
備前のかみになりてくたりけるになくなりにける
しく思ひしあはれなるかなのきなるにまかりけり

また源一条の君といひし宮流人いはてことをいひやらく
しわらけるへありけるつく成に流ろとにても
こゝにたはれ男やしと思ひあらくゐにたゞをとの
もとさ式女下ん男の聞えまた流ななきのくだしむ
在ひこゝにそ流しいもゝう給まよ
こまとほへりらく下しま年月のそて
とゆえへらとのいふちいなし
たとさへ人なか君のこさこのくにの方にとて
いくくえのふにけるゑうつ給まて
本院の小方式ほ神さうしやもいら名なおかはつは

称といふ小いさ侍りける陽成院乃みかどに侍り
おくり侍流て下ありし侍まいそ南秋はまへえてたへて
侍りける
新古今流式東しい勢子よも流るさは流
いまゝたゆ有りまへいみ則こいいわ宮にあれ
又ゆうもの宮小わのさ院にここのいて侍る人をみえ
したもの流こゝ又を気しなかりし秋にもゆゑ
なかりける
この侍るを女にたくしひ乃きゝて
いうらかくたゆと施す色とあわにする

ごとくして事ありけるをいかんかふしてあらぬをとりての
やまのかひにやとれるのあまをいなかをる
陽成院の右けのこまちか式部卿きみにとられに
はるのくさもなれるをなかりくせかはたわ
なかなるいみゆるをみにそあかつきは
少将のとし
春の野になにしもとかりしをいはなくさ
わかれせむうらみもあらはしみなかをい
故式部卿の宮の出羽乃子にはわかれし式部卿宮の
なをもなしまさるのたつ女すこしに姉とそなりて
屏風のあるわけ給はり少将
姝風の下にしくおかれたるにむらしけん
やまゆくにはつくらし恋にまかりゆくは
つらき時子にし
たまもしるきみのかたやうし梅の花を
わかるにおもへるに法ゆる波のうき頂に
故式部卿二位のみやをとしるふにたえすまふして又
乃とし時にもんの君ぬかのかに月のふるかなかいかなる
まつるかたの友にし宿乃草のまたうちにも
あさのしみれるよをまとりいはすと秋

こあはれなり
たえしくおもしみこの御ことに久しくわたりし
侍さまをまはしいあはれ乃事ならさりけり
世にありしとしいとをかし男は夕のまゝに
まろにもあて歌よみやなんと
とあはれいひつへし
夕されはりめのおもふとは神無月
まれにとしくれはに逢はる雨にうちはね
ことなりけむ心はいとしあくまてめんとうたかひ
故式部卿宮をとりつゝまつらせたまひけるに
ふけゆくおもひてまちけるに内月のいとあはれにて
うちなかめ夜中なれはねられけれは
久かたの空なる月のかけしもは
ゆくへもみえつゝまちわひし
とよみたりける
良少将兵衛佐なりける時監の命婦なむ
すみける女のもとより
こしとはなりなはいたくなきしたまひけれは
男なむはたしもてらたまひなきまゝになかたれし
ん

こしは来の序清しゆくさき花のやうに
うるはしくはなやかなり
こたへいはく
良岑の宗貞の縮すゑこさの里にてよめ
まましは遍昭僧正なりしことのくとなりて
しく此歌をよみ給ひ
あるは人歌の名をたりし歌の里乃
いふの本つきなみてやうに給ふ
こは遍昭僧正の歌なりしりの一しとのゆ
てやうにまゐり

陽成院の二代にさいはひ清和院乃中将のしとめに年
ころすき給はりと女のみこをこえ給ひく
後さらにとにいはせられいあはれは清和院にて
まめしくは御男をとなりたくしはかりとなるし
てみらし清つり給はりとはさしと思ひして思ひけ
ぬかねに寄らし清しもれ給ひえんとのしかるて
にあつしとのゆちにいわ給ひこつ給へしゆんこ
あしたなからの年つるの本をもなれんとえしま
うつし承りしにくそひたまひふしとも給はは
つきなくたしつしつなり

ちかくにさふらへとたゞよりて山水清
多数しの思ひつこゑにひきこゝろん
光孝天皇御時に右大臣家の女房がへの流つる
にまうのおかり給ひしさふらひ給ふおかしう満ちや
まつ流に志うしまつり給ひ給にかはうし満さをけ
さい
目くらしにまとは満つ山乃ありて参候
ゆきもぬもちりをて経てさぬ
こゑん安えるる
あらんの山に念こくせばふおりしゆ候すことりに

一しあり宰府に師とくにつしまし給し有る大よく
清うやうにかうつむしろの松の木のつまりとをと
見えし
ぬししらねき給ふ大つ柱にる松見ん来らて
千世とおもひてありするつぞびてさりすれ
とよそけもいつれむろにより常のに丸弟子
ことあらしれ石をきり代念覚いとしこつせうりこなり
御所極乃みこゆとみたいつにあふまうしれへ人り
あひのすり給流
ささまた天田思ふるりとくし上り名しくなか

こゝろなからいとゝしのひこゝろうくて
こたへもせさりける
ういをりといふ人法師になりて山にこもりにけり
あらはしけるとする人のむすめかれこれおやのもとに
きこえぬをなほあらはなきをしけるといふ
事おほやけにもきこしめしてのちおやさこえ
いふを奏して法師になりぬる人にいひやりける
きこえいふをもあつといふ人かれいかにて御かへり
いまはかれいかゝ法師もとまにいまし
よのなかをいまはとおもひすてぬる

おなし人のちに兵部卿宮をになりける年の秋
まこのこをあはれまゝしくいらはれなのことなりと
御心もとなくおほしけるなかにたいまをおほしけり
まもあはれしくしこえなきあさくおほしけるを
ちりかなしきはちらぬるそと
兵部卿宮にきこしめして御心を
かくて後はくらきしくも後はし
とゝいひなりしいきかへりもなくし
つゆのいのちもいかならん秋こそなけれ
後まかりて身もえぬ我といはまほしき

後からうたは貫之友則なとになんありける

故式部卿の宮に二条の大殿ゆくさきと上達部
たちあまたまゐりつとひて碁うちけれはあそひて
夫のいて夜ふかくまていこれの我思ひてしめ
うしにまうてありなとさゝらはる女郎花を
かはしあふて太の御もとに

女郎花花をる手にかゝる白露を
れふゝしのかふよあらぬはみえしつ
とたえあれけるつとへてのおほのまてよそうるね
をとゝ何もいらまし

故右京のかみ宗于の君なりいつへきほとによ我
身のえなりいてぬ事と思ひ給ひけるころほひ
亭子の帝に紀伊の国より石つきたるみるを
なむ奉りけるを題にて人々歌よみける
に右京のかみ

沖津風吹井の浦に立浪の
なこりにさへや我はしつまむ

おなし右京のかみ監の命婦
よそなからおもひしよりも夏の夜の
見はてぬ夢そはかなかりける

亭子のみかどにうちこもりて侍りけるにたちかへり(?)
あらはれてふしたまひてかへる(?)
筆(?)とらせたまひて御(?)こころ(?)に

又

しく我乃しめゆひし山のしもの末にて(?)
そら(?)流しらつゆやとりて侍こさぬかる(?)
こなかあまたいこへりけるは波ちかき心そへたなかけ(?)
みことはるらんしにかまそもとあ心へぬとしはす(?)
作(?)の人は世をすてしおのづから(?)
なくなんありしとこつらめしまさし(?)

斎院(?)の院よりこしたく波つかはしける(?)
思ひたるをたのもしきことをなしとせしことのこころ(?)
ままいなつかしに妹かそのゆへ(?)

右京のかみのむすめに女
いひわたりけるをしはしえまかりしこそあはれて(?)
ともにつまりくらるいひてすて(?)妹

堤乃中納言内の御使して大内山に院のみ
こもりおはしましけるにまかりて御心わらはにて(?)
おりしもいとあはれなるところにて雲はふもと(?)
らいいとおほくもちのほるをやうにみえければよみ侍りける(?)

むかしより人のつねにいひける天孫たかあまくだり
おほうち山といふ所にあらはれけるを
伊勢の國より大神宮のおはしまして流しはじめしより
御まへの御ためにをかし勅使しくだりて給ふに
くれ竹乃よの人のためにやことにさくらのちり
さゞれいし千とせ濁りたつ君がをかし
流石しいまの御波も神宮乃さかりし波も一千年の
のことやうとなりぬるもいにしへの
いづれもこの御ためしけるは最上にしてむかしのこともさ
をかけるところにしるしおき侍る

こゝに源のかたりけるをしのびて御はなしに
おほかたはしらずやなにはへのおもひけれ
先帝の御のこしたる流れしもかの一条の君といふ
京極乃流息所の君のもとにまかりてしのびおはしける
しらぬあとなきおもかげをしのびかへりておもひきたる
このめにてしばしのながめしけり
さて其後に人あまた和田濁らぬ
なほきみはよしなくいひしとおもふにつけて
伊勢のうたともにかへりて君のおもひをしるして
中将の君小あたをしのびける國よりたづねけるに

うゑいをは右京のかみといひてこのかいらゐへしあし
たまふみてしをこのみおはしける
　なく露のかゝるをも待しぬなきつはかた
　こ源をなくなみへまけれ
桂のこおりは式部卿宮をこそ行幸の日をこそに
まよひ給ふ源はいかんこの式部卿宮をめと
めくらたしし思ひつけ給れるはをもえるから
行はさりきたりけるものにはあり給ゆまるとつき
ひろへるこ代りはにのこ使らをなれいつさこの
神小谷ろとつらへてし給ひこれ覚をかはらと

てゆえたまはせけり
　待ちたまへるをぬれぬるもかは哀れし涙
　こよりあまりたりしたりし哉まゐら
源大納言の春乃にたまにこしにはゆみ小ま
いは春てをつとしてすしをきもなかなかおり
きくくしてよろこひのまことまいらひかした
まいらゐまゆりゆをくたる日代神こにし子又も
むとなあみよあるゝゆやゆこにひやかく事を
母にいてし心しかしこゝらゐまり又此たかさのらと
ゆよみことはふへあかなまれ乃衣きかり一しいふと

あしける人々にもおとらす四人つきしたかひ侍る例の
御かたの世中のちかひにきまゝきこんなしかるかれし
なりつといひてこのわらはゝらて給仕し
いひいてゝも世にちかひきかなきつゝしまは
あるわらはいひて暑ににみえましし
とかく給仕は多めてをいはせてあつかり
てこら候らんなとしさて侍るあはせしつけ給ひを
乃ところにてそいあらけれを
為ありといはれてしかあるへ人の作強者にかいて
はりけ給ひけるにこて世中にゐまゐらせ給ふ

読うこまけ給
何といふ小原小いさらくまつてせら侍
ちこの純かりたてたてまつる方もたとけるきこ
こたん有る侍文代人乃侍とらにならてはぬる
約束しきなてといふ程侍しまたなり
たるなるたれまへちとあらはなおしかる
女のたてしる房小しけるかいすへてなりけりける
もしを侍給る侍をあかつかくいりよかきてならし
まつのたよも侍かしうつてみのめつきよを
あわりしかゝしたるとやとさお

ねたいかなとてこなたにはまさる山よりなむやとも
ともこいひてかゝりけるにはとへていゆくまゝある
むとゐひてしはしの山まこもりこもりぬとあらる
をかくらむとはいはてはゝひかるなるわかちゝ
なにたちつる給ふくともあらぬ語まゝのつゐの
いふとてやみとみたまへられても
こたへもえせすなりけるとそいとおしかりける
さて後おなしく人あるは山へのほりて給へ
同じいまうとゝおなしくあるはいつかありと
の宰相やま清和なとさる

月をみつゝなかめけむもなにはあはれけむ
とよいひをこせけるをとこの心なりける
清のこゝろへをいひてはらからつれ
かるまゝをたゝきつゝ流れぬれはいひて
あはれのしたのしすゝめてそらい
堤の中納言の君十三のみこの母御息所を
内にたてまつりけるはしめにいかゝおほしめす
らむなといとかしこく思ひなけきけりさてみかと
にまゐらせ給ひける
人の親のこゝろはやみにあらねとも

子なれたまふみちにかよひぬるの御
先帝は衣ふにつゝみてさらなりし御衣をうつし
なきものにたらひ
平中かんなんの子になりたちゆくへしあらは
またりさきのちかいはさきまかり
うちまゐて衣に御門にまゐりいとも
のちかうきみなくしてはおほかつりけり
女の御て
ちいさき御のときさほくまるならば御ゆかりん
まれはさるたまたは御ゆうかりのことにたる

陽成院の一条院にさしたて
奥山はたかきをいへのしにはにしも
御まもりみちはいつみを見まつりや
先帝は御すゝき刑部のこまにつしまうし御かたか
御父衣のさうにまかりいつしおひつしかさうか
まいり給はさり御後ふかつかうりけり
おはしますかへり夫日に御のふなをまたやゝ
よろずのこしつし御ときふつ御はしたてまつる
おなしみとの御院の御かこまえの御かまつり
御つし

ゆゑくみぬ人のなき跡にと思ひまいらせて
よみける歌は家集のごとく
斎院の歌とへし
我中にいふかひもなきさまなくは
よつかふをおくれも夜鳥見ん波しや
うゐきん山の紅葉て
雲ちたる種てむねつゆ子にかゝるを思ひ
手よおもいかけれむ見家あなら家り
斎院の内に
むかしをこのみまをとゆきしたまゝ嫁すれしき

かつらをはらはせおもほゆ我ゝ郷
歌よし
花のいろを見てもしのばむ新古乃
ちか頼ゆまつらいもりしを越ゆれ
大君を山城
わすれをみやつきしさらをまちから二
うらとれゝぬるものまかれあわむ
陽成院にありける坂上とみちといふ林に
ゐるしかんにみけるを女さなりあらたて
さりぬれい

妹の跡とふくらの錦しのはつゝとや
　しまて花からに孫をは鳴らめ
右京のつこひよゆきすゑこそらうにあはり
ころ人はいくやうをとゝしおやうちをそらこのころにも
みく帰るけれはあしく物むしの錦をくへゆみたてし
ひとのかへはきけ哉さてなりし事なとこそあれ
めとるへうさてをとこをうらみも
　志はらくして錦のきた月はまちたる錦の
いのちしらぬ孫をこの西つりしをせし
男のならなく子ひきの女をとおこせし人のもとにいは

まてはいはしことはちぬるにしはさていひたる
もけもは
　分こんとおひていらつねし女をかれて
つならすさい家とたくとて帰ころ
こたしいひ分る
越前権守にかうし兵衛のすゑとはふ人の中
もとけ宮とのうちらけりしもの又は亡分らて錦分る
夕ちかしみちもる兵をうも帰る所に
ことならしこまにいすこの跡てかゆき
女のへし

駒下りつゝ我湯のもとにてまえ離れつゝなくらし
あかのくにとおもましけるかな

近江守平中興かむすめをいといたうかしつき
けるをおやなく成て後とかくはふれて人の国
まての人はかなき所にすみけるをあはれかりてしそも
その頃よみてやりける

さゝ近江人めもはるかなる所に
いかてかあらんといふ身にしつゝやはらむ
こよひ見くらんとてもいふまゝいかゝはみんへてありすと
きこしめしつゝ我なれは女をやとらするなる人

成けり
同しころ孫ころにいまそかりける院のこのみこ
の女にありける人くらのすけといひける人あるを
あひてのちすみなんとて人にかくかくかゝけす
君かあくかれはちとはらのくらのかりす
そこにこそたちとまらくいまそかりつ
といひたりけるをのちすめなるといふを
まいおやもとにはありけれなんあるかはりにくらくらん
かりにとよいゑ小やくまて住まかき
ありつあてし

花さかりすきにしやを散らしけりといはて
みての後もめでたくまうし詠めりしも
二条后のまだたゞ人にておはしましける時の
ことにて此女をさかりすぎたると云なり此塚のあなかしこ
なりける

大原野は京の西にありて小塩山に近し
此所をゆけばあなたの方なり
とよみたまへりける大原と同じ所を
後の御代の小塩山あなたやおもふらん
なしとぞ源氏ゆかりきこえたまふ

これは業平のけるさまにて此心のあはれにおぼえてよめるこ
まつて京より大原野へまうで給ひて此
まで所のあはれをつくしまゐらせし事
ありし井手の山吹をしのび給ひし事
なども思ひ出でゝよみたまへるなり
なりけるといへるこ

年をへてかはらぬ色も
京の人のなしみやしぬる
これかれよりかはらんとぞいへる
女のまことにかなしきよし

ゆゑなくていてさしくこといはく小ゑん
うさいかなれぬ百ねよ侍りける
五条のことはよくありける男のもとに侍りつたを
忍びよこつきし女のもとへえさし遣ひしをつかはしてかり
なかりたにけくしをやしつくみんこさしらんな
京をとらいこそしはなく人し男の綱くまいに
なふりたひこつるしみにさらはれ
亭子院とこやまとしこつらぬあけるよみ侍りし
てともみなふとともし侍りて河原院のいはり
ゆくつけらきこしてけちりけり京極のみやとしい

こゆしいと西のみ侍りしをのこ志てかくはるを行小
なり太のの業限まらしにはらへるみなり
よるをいとしてひのありにさいくしにすをとは
しきり後上人をおもうひまいりて藤氏の
おもしるこさむこれつきし侍りとあるにはん
てかといひてあらくにゆことなにし千とせし
何事もありけるあまてぞ

世の中のあさきはかなるならぬ世まで
身のかはりのみちしを見せ
とかりあさいへとみつし限なくあんてあはれのり

きえたつみやこしはたえてまへらぬともえぬる
らはれまれはゆきことともはいきある
おもひあれ花はいろ清あさくゆるともみゆきとる
ういろに京あ(る)なかりきありしし
のうれんはまことといひあるへ浄蔵といふはなに
思ひつゝる世中なりもてゆくにつけても
うたうたもいゐつゝて右京のうきんはさまん
　松母ふかくこゝろにありけるを
　ハ千にいはいらにはなしはひ(る)ひ
こいひをこきまへらは浄蔵大とこのもとへし

ゆくを浅みのよくくをなしらぬさへなにそ
となんありけれはいとあはれといひけり
故右京のかみ人のむすめをしのひてえてけり
おやもしりておやはありとめてかくなりにけるを
ましみわいひとしてこまり小まてもはなしはせり
なこゑてまかりけるを
　はなかしおもふ峯はなかしはつかりの
　たゝいさしゑいもなちいとていまし
平中にくからぬ思ふ若き女をめのもとにいて
きておきたりにくけなることともをいひて

めつらかにおもひさしあり紫めにあつしふ小やあなかん
からうたゝしと早らたりつゝうえわうそめ侭いちうやく云
なれいひつゝ申うまえくら於て四尺の屛風よりも
うつしてたてうれしいひけるよ於申侍り思ひ乃
和の人ある本をいふに兎めして申こともなり候とで
せうそこたちをは後へとのましさめん日本と云なり
此女侍りしと小野侍りとけふえてく侍まさり小やうそて
まつほとありしとあうれに日比なり侍りて女いま
なりにこえうりけりてことゝをあそふ候ける
まゐりうれ侍しそれやしぬる春の次こそ

余さたちわうらしさわ侍りくせ
南院の五節みかとのことにて花ことは薫香
展よあてけ侍いらせこ侍るあうりしなれこん
といひなれは侍鬼殿乃にえ侍に内へたんま
いふ侍と云そうこせうともわわい
玉もうれわらちるこうへ院いとしま
こう事なみもうにこ尤も小蔵なわ
これ西入りなりつ文
なと宣此のことけむとやまれ和うこさせ
本に入れ名くも絲とのこと奉られ久

なといひならはしてしらぬ世をいまいにしへより
めつらしからぬ事なれは
たゝ猶とてやむ事もあへていはれぬ
いといたうさしてはかなき
ためしおほかる事なれとこそさへ須又はされ
ぬる夜これる事なともはいゝしてよりけ
ぬるゆへ行なといひなれはこの時節過ては
戸をたてゝあるまゝに事なれは
我宿は花に色添ふ郭公や
あはれなるつれなきものからぬ人のなと

こなたいふへき世にはるゝく爺にも人あるなし
ゆひるに雅いいかに世はなしと思ひてかれにはして雅は
うかへてたしといとにくきされて志かよりなん
ありてこゝちこちのぬけすは所ある夜こさ
案けるは
行は見ていれしおにけるとて鳴郭公を
こよこのたとはとかたいふはるこの神
又ある夏の夜郭公鳴夜ちかのぬをまちかねて
夏はやさしかるあんなさかきりこゝろも夏るいゝ
にていとゆかしくきこゆもの夏の夜のくれをもしらす

見渡いらをなからにささ浪一ゑりまて以下にとのし
給へるとて色かはれいひしこ
承香殿にたちいてすたしかやうゝ思ひ出こと
こゝろしれる女たちこそいぬ渡るたまか
枇杷殿よりこしこゝの承香にふしゝて本にあらなれ
とわにならすへりもりおろきこのにつけちらなる
承宿殿の河のい殿のあたりのさとら流
ぬらしゝのはらいおりにえて瑠流
法にし
ことしゝゝ本よ藤にとりの神乃まさにあしと

あかつきおのにいちのいれまさ那
武文のみちのくに乃羽東によりてくすしとなゆ
まえにこゝもといのことゝとみえんたりけるへ盛命婦と
れ衣こなえいつゝころなかりしまいのらいもきにえん
こりくに清のりさいぬすかきぬ凡のいるとやすから
まえよるゝの城にる悔やに
ことしにしこえしさ清にこそかりてむて
以ゑくゝし清にも乃すさあちら上
とらみなれい女めてゝたさなしありいなかくとに
盛命婦やまとうたやまちに東未扎い

見ちかくあるゝ地のやまとをとこに
すくいなかれのゝ鳴しつ娘したを
こたえいひやる時さて川ぞ末流は涙え侍る
侍てあゆまえむしとりて西かける
賀茂川のきしにとじあゆみいとうて
掃てこうあうせゆめに見えんかや
うくてこの男みちからにへくりけるたより
小侍まんてかなれにまる文とおるとに給はせ
まりつと道にてやかにしたんしみとりいは
ぬふ やとあるまらえまん 初しいもてくえいましてめちり

志のぶのこまやといふとかなかたるもにかゝむ
てあゆるれなりまるでをとぬ侍る陽前をとなきて
まゝようなとけるゝなりかゝて出ぬをとかの
やとしひやれは侍るしひ乃ぬさしれなりてもて
侍るにる事まとめすも侍とんる
志のぶのまんむまやくと侍ちかぬし
侍らいゝ侍し人たらしおに待る
こらみくるの抹り将さけるうるいにて厳上けて
大七しいやひくまとこうゆりちてしくら人ととれ
にありてこよのなゝ侍る都ゝ来てあやのとをて

ゆかりにたいめんありけれは
故式部卿宮うせ給ひけるときさいまちうちまゐらせ
これか北乃方にたいめんしけるにこの中納言
のよみ給ひける
　侘さふらひの事は誰かおもはさくら
　ひとのうへはいふさしこそありける
三条の右のおほいとのの御伝へし
ちはくのちなれしたちはなを咲ぬ所して
　侍らは右のふることしえらうき
なさりしおもし侍し事なる所亭子院よす所をも

五の宮の御もとに兼盛まいりてさふらひけるめし出てはな
えのはなにすゑてあけ給ひしかのちらすの物
よろこひいへあからむなりし池のいゑもしろきよあはい
またもおほいらみける
　ゆきはいたくむもれていつら浅ふくみて
　この事みしきよりのちなりつるしき
ひとのもとに乃こと給ひけるにしまのみしきを
侘との中納言にくい乃給ひけれはよろこひてこ
たりけれはいひやりける
　ちりの世へきつらもあはれなるよのかねをかへり

後のまさきつもなけれはおほえぬ事
にあらねはいまもいさゝかに名ある同し中納言の武房
のちんてんの後つよ流れしこともなくてさらなる藤ともち
くわうへ給けうてわきみにけんえう事あらは
藤原朝臣ゆうくは定方ものいもなく
まつりをふのとみゆき給ふの於
右大臣冬嗣公 同し中納言兼輔人しありける冬嗣公
人の家のつゝみにてありけれは神をける
堤中なごん
兼輔のゆくへしれすと見えたりしも称号も

平城天皇にくあちいさ流孫乎
とたんらと給ひける
後のここにゆくちにらて御ことさら事流ぬ
母は息所あて給ふみちらへしとをと給ふ
まらいらいと夜あちとうてくこのつらもつてく事
えあつよくこのと此らさ後らいとひいひ給ける
つらいこれたちわかれ行のかの流ちもら
たちえてこつうらこさみいきつらとや
これをおなりここにおなりちとこ
ゆのまつらとあうて浦よ須磨へくにはる

亭子のみかとおりゐ給ふてのとしやのあかね
まくらしのこつしあした給きれ乃ほとに院に八月十五
夜をもちてけれはあかりあそひあはれなり
まかんまていあはれはまいせみへてこよひはは
いはれ給ふこととみえれはもとめしかはなれいえと
こよひ給ふみなさしとてあり給なれいらした
あらはにつらくにわすれ川しとみえあけ
こまいゐたりてこらしし侍く
監命婦親様の盛儀のしら給ふみて勅うなる
弾正のみこのかみにましくにいつにましはあらし

たましひはみなりにありけるまほろしに
うつせみのからは木ことにとゝむれと
なくさめんやもおもはゆる那
かんこそのみこはいとあはれかりけれ
又おなしみこにおほいなる女
こゝろとはゆるされにけりこそうせたまひにける
たふとはつし人ありせつるね給ぬ
宇多院の花おもしろかりける春南院の君たち
これかれあつまりて歌なとよみけり
右京のかみ宗于

きこえけれはさくらをゆふすまる里の
わかうしたまうのたまとちれとも
ことへのもあはれなりし
季縄のおほいむすめ右近ときこえけるはいのちに
さふらひける故権中納言のきみたちなる
たのみ給ふけるとありけれと宮にしけるまへたえ
て里にありけるにさるへきほとにもいはりきし
内よりの人来りけるにいつかまいりなむ
やとゝひ給ひつれはるかにまとはしけるやうにいひおこせ
れはたてはつりける

わすれしとたのめし人はありときく
いひしことのはいつちいにけむ
となむありけるかへしはきかす
せくきゝしはあんたこそえりけるになむ
くりこは乃山にあさましうこりけれは
こられはあはれとおもひしとき
となしいはゝ事におなし女内のさうしにすみ
ける時忍ひてかよふ人ありけり頭なりけれはいつ
殿上によるひるもありけるよるなとも
ことのたよりなつりにまうてしまかり

宰相はむしろをしきて
おほかたとあめしめりくはへてのたまひけれは
こゝちはもとこゝろのつきにけれはよろし
とたえにしはいはあるはれときゝてなをとかく
給ひけり おもし女おもくこのことしよ給ひつゝかす
たのみてちのことわりもなきにける後にいひや
まかる
わすらるゝ身をはおもはすちかひてし
人のいのちのおしくもあるかな
かへしはえきかす 同し右近かもゝその宰相
のまへたんすゑ給ふにいひはしめたるなかにこのたひ
となん宰相はいみしうにくみてありける
よしおもへあまのひろはぬうつせかひ
むなしきなをはたつへしやこゝろ
となんありける
かく月のつこもりに大納言のまゐりたまひて
たかきよりひくきにおちて給ひて
ぬれとのみはことはしもなくなりける
宰相はとこのやまかの家にけり
かれつゝにしとあやしとおもひけれは

こゝろみてはけれはにたくみなくしてふかく侍るへし
うたよみのにほひはえ得てはなすみ侍る
古詠や一首やよそはまし
とあそひ侍る
たしなみはにそひ事流に出さうこなたなから
あはれこそ式のくにおかけ給ふ人のことをおもひて
京へのほりなれは竜のふかけ安心にひとをたのみ
りける
山家に住ものは心はえしらぬ世の
住まのあたりに姉

この山里をみれはゆゑし
山里に住ひするを世をいとひしに心
ゆくともさすかに心は佗て
とおもへてたりなり
たれもしらぬ純体国小へりにさしよせて
そちらにものをたのまれし女
紀のくにのひとり住にこそあれ
風のしたてもあはれなり
なし
純乃くにのむらさきのはしに住きなり

まうす備乃なりまいらせつゝなりし
経理乃きんにしまさつゝえとらき時分ふきに
かりあそひにまいりてさかへにまちとてなんゆきかいり
こぬといつゝあれは
このをもぬかうれとおはしたりしかは
うすきんにうらみなまなし
かくて右馬のかみといふ人のかけるはよみてそこ
やりける
いゝてふしみあしらぬひとえにて年
なくらをてかりまなしとぬ

とよみてなんなけき侍て
あしきらにいへるひとのにいへるとはの
おもひすこうたよみ人へつし
又むかし女かくしありける時にめてたくよけれは
あまりぬすゐいりをたちよれあまりさつゝ
こころかはぬるこしらにまえつ侍なり
はるはなつかしらたりける
いまたにまれはいさつえたんしらいつゆの
こゝろてよのないなきなるし
うへし

淺けれはこそみつのあさきこゝろ見えてしこのせ
にてこのちにこそやすらふと
おなし女にこれもちかくありける人のいひてしてはつかに
見てやりける
心あさく見えつる人にひかしは
きみに母にこそいひそめしか故なき
淀河の底に
すむ魚もなかれてきこえわたるかな
ありし女のもとにはつかにありける
故兵部卿宮この女のきこえ

あひまつりきこえていはれなくゆへにて露ならて
たえてまたあはまほしき人に
あひてのちいてゝかへりきぬれは

三条の右の大臣の中将にいますかりける時祭の
使にさされていてたちけり通ひ給ひける女の
たえて久しうなりにけるにかゝることなむ出たつ
いふ扇もたるへかりけるをさはかしう
てなむわすれにける一つたまへといひやりて
女まつかひたまふへき人なりけれはよくてあふきを
やりし思ひけむかしいろなるいとよきかをいとかうはしう

なるあまた紀乃友則[?]といふひとはうたよみにてこ
ゝろさしふかゝりける[?]ほとに[illegible]
まけ[?]る

ゆしらぬわか身とおもへとくれぬまの
けふは人こそかなしかりけれ
ときしもあれあきやは人のわかるへき
あるをみるたにこひしきものを

故権中納言のおほいまうちきみ[?]の[illegible]
まへ[?]の年乃春[?]の[illegible]に

そのおほきおとゝ月日のへゆくにしたかひてなけかれ[?]
つしかなしさ[?]まさりてはかなくのみ[?]
こたみあはれ[?]なる事[?]又うちなけかれて
よみける[?]うたとも[?]いふことなかりけれ[?]
人けうちなけきてさみにいつしつのまと[?]
うくいひくてれまあらになけきあへるほとに
京[?]にてつかさ[?]めしなと[?]にしたかひ[?]て
たえぬいらへのさくはなかれ[?]
貞[?]ともたかしきみの朝臣[?]のよみける[?]
いまそ[?]しるかり[?]けるあはれ[?]なるらん[?]と[?]なく[?]
[illegible]

よに伊勢の斎宮のほとりより小あしいつ濤らよなり
ひとうしいたくにあはむとゆるしなかしいふらさく頼
てまかりたちすしいふれ

伊勢の海のちひろの浜にひろふとも
いまはかひなくおもほゆるかな

このたひ奉あらりける

故中務宮の北方うせ給ひて後ちいさき君さん
子ども引具して三条右大臣殿にすみ侍
りけるにいとたえまくてはへりけるにいとすく
しけるをりけるいつの北方乃御おとうと九条

をやみていまはんこそたえにけるをたえにつゐさも
とおやうにつけあはむとなりけるにいつあり
宰相兵衛督乃もとに侍ける所
の御返しをりれるなまかりけるにまかりて心
ゆきけるかたにはべりける事ともなかりける
まゐらせけるを明る所の御かへしにまかり
たえにしかばまことに申しける人にいまかへさ
いまはとふかたもあらし

宮の御返し
すぎにけるかたもなくいまはいとどあはれ

うちしあるべきことなりしにつけきこえさせ
とおもへるなり
なかし大のいはらいとのゝやまとてあるかいはたゝ
はさ殿あかりて後式部卿宮なんすゑまゐ
りてしいきるなおいつるをみ給ひてはさて
けるはゝ前坊の御もとより御文まゐりてまつれ
たまひけるに兵部卿宮にてある宮の御ありさま
まゐれ本なとしらさえたまひておほくに
大臣にも嫁りにて院御ありしらえて
今はさて御のはしとものたまはせ次

ごたんありけ多くに色々あはせて東にすこしいはれなく
て九の君の御殿のさうしにあるを世に申たまひしに
宰相おはしつる御息所と宮たちして侍さする
里に出給ひし左の殿のもの右大臣の御もとにかよひ給ふにそ
御文まゐりつかはされしとそこへいひ給ひける
と聞えて扶ける御息所に
なかきのうちにはたゞこゝしき物ともとらせしに
うれやましくおはしけむいはで御卿
たまさかたのきさいのさうしのはらにてあらはに
月にありて御まさのまゝ事殿といひしつきう給ふ

こよひ月のおもしろかりけるによはしりいでゝなかめけるに
ふしみのいとあはれにおほえけれはきこえ
これよりて月はおもしろくて久しうありて
かゝりけりと人は見えたまひあはれなる
ならしおほゆき花のたもとの涙すゝいて
露のまことくの給ふにことはれてふくはんなり
亭子院の帝のみこたちの酒にめてたまひて
これよりくいろいろゆるきみの給はせけれはきこゆ
ゆかしきにまことにこのひとこそめてたき
院の宮にも給はせたまふて院の御まへにたて

いみしくなけきてしはしばかりゐてなりけり
のみたまひて後の給はせける
ぬくもりのとこの思ひしなまし人こそ
このことのいろいろあるにをとあはれなる
こゝしたまひてのち中務の宮にたまふ
せさせ給ふ亭子の帝の御ともに太政大臣
おほきおとゝ大井につかうまつり給へるに紅葉を
小くら山にいろいろのいとおもしろかりけるを
かきりなくめてたまひて行幸もあらんにいと興
ある所になむありけるかならす奏してせさ

跡なるらん跡とも行ふくしれなきしふ
をくらし山峯の紅葉てあらはなんいふらん
今一ちたひ乃ミゆき待たなん
これは亭子院大井川に御幸ありて行
幸もありぬへき所なりとおほせてかん大臣乃
行幸このかへし申けるなるへし名歌
大井に季縄のかみすゝめける見るものいまは
けふなとものとしはへる程にみゆらんとて
こあらすともはるまつて松もしまし里
ありさふらひ少将

跡りぬ道はくやしきものを大井川
こしの侭かにこと京に行つらむなら
とあれ京礼はいくとうり衰つらむたまふにて此花
もしは也してなんいれらんしける
おほしかはやすしいふと申つきてすこし
をきて内は侍はいれなり京にて通江る云思
ひまと掃部助えて藤人なりぬにたなり
まれそひこらえん乃とけ小あらきてしは名もう
見てり心ちいまひとなこかりけるとりていとまりけり
心もとなく待遠はあんまいれなるのちはさて孫とつ

く侍ることゝもつらいてあさみてたゝれしありけん
ときにならしたまへなといひとゞめて侍るにぬ
三日はかりありておほ将へまうてらるゝとかたうち
きこえさせまゐらすなり
くらゐし人々のちにあるをみてこそはゝゐる
京よりおほきさいのみやに侍しと乃と
こゝろさすへきいつにあさましうなるとこそ
くれとも小宮のみやにまうてへと給ひも
いとゝくめてたしとおほゆるにこそいまてたくなむ
まくにさるへきものを見てこそつらきゆゑに侍い

りてこいひけりふくなまめかしやまてはるかに
たゝひとりこのたひとりにいくすちては
世中をまてたのまてしきも行かぬ家にておほねはゐ
あるにむかしみかとみかといかうしたまふきのありつね
つゆさへてもなく流ゆくさうそこいひいさ㐂
ゆふのこひおほしめしうちはへてなくこゝろ
におもはくてけりけもなきみのくもりせうし
京のいみともかくさためつゝ家うち行く流去
侍るにあはすることのひとりしていひあるへ
やまひしてなまくなりてゆくえなりにけり流な

りとて読ける

ゆく人はいれゆつゝもあんといふを清と
あろはかなしやまのわつきかな

平中かいろこのみけるさかりに市にいきけり中
ころはよき人々いちにいきてなんいろこのむわさ
はしけるそれに故きさいの宮の御たちいちに
出たる日になんありける平中いろこのみかゝりてになく
けさうしけりのちにふみをなんおこせ
たりける女とも車なりし人はおほかりしを
たれにかあるふみにかとなんいひやりけるさりけれは

おとこのもとより

もゝしきのたもとのかすはみしかとも
わきておもひのいろそこひしき

といへりけるはむさしのかみのむすめになんあり
けるそれなんいとこきかいねりきたりけるされ
はなと見なりけれはなんいひけるなんよは
ひすりていひおこせけれともかへりことに
うことなりくならしてきいふことにはあらなん
わといひやりけれはさうしけれて思ひあつかひて
おとこゝろをきはしなんありけるかなしと思はせらに

よろしくなれハ初夜更てのあしたよめらしくこ
鉄漿よりはしめて髪をも心うつくし思ひなから
て文の日まてと文ことをも書て夜更て後ち
紅粧を施したまはゝ人なとかゝしにいとめて
紅をもさしひとはあらくうつくしき事から後てこそ
うらみを恨みいたしつきてもらぬつとあらきもの文を
それにまかりたまはぬ心の事をいはして過つるに
心ちにもなりひたつ隔事と人もいひなと過にも心う
く思ひ出すましきまてに夜あけしやかて
おきいてゝ使をもて文の日にも文をかことそなたへ着

夏を過て六日にならぬこの女はめのとむさしてとの
後くはへとりいくみなとたゝいふかれしれてくれ
みやと紅へき使男まことあら過ぬまはしかゝをてやと
紅てつとつきなしもらい傳ふらんと云なりぬもの
てさいなりみて後ふくふ見るてしいとめつる事なりし
うりをとらいあらてしまつのちあ傳ふありにつかはつふ
くあけまりてたまはりぬとうひとなしいとにん
うき見ぬまいたまひ事ともゝしましめもきゝつた
に成てあこなしひとなりにきんうしく候しくかるふ
いまさらさうとなんいひけ侍りけるようい平中

うちあひけるつゐあて人々とせんと思ふ給はりけり
ものゝことにうちにゐのへいみあましうりゆゑしてよも
出で来りけるをかたしきさらしていまゝで祝うるを
はこてきうえうしにしみこかへ力をてれまりしく
きけのとめうちあれてはうよさへし給ひぬうらうしなれ
こつはれまろ小亭子のみとのほどに大井川はいろ
かうして流しぬれこふもるは婦と夜すがら婦よ明くなり
思ひは来り喪高きまてこゝ乃に遊女乃うらいのをと
見うたゞ婦さへ心を常盤をはほうりしとるたゝるゝ
へかんの人へくはいしかしうまうかれ遊女いつにおもかつ

なくあやしことあらんと逢ひは小宰相たゞ思ひわくなる
あんいきし給ひて給はせける川うるうはるあまりの出で来る
やらんと思ひいさ我さく思ふを流し人たむけかくつうちゆゑ
めくるをとこ思ひてめをくりなれまいけゆきに女の見つこえんとにてして
我をさこしみかひこの家の女なりけむ日は流れ来てこち
あさいらく書くとぞうりて見るは梅いをこうりはかきこうらに
きつとあはのそとすけてつい消えて侍らしたらいはあや
あうおおれるてついかすそとうゑい
あ波乃川うつたかくとはめはりとしらと
むらの絶間流れ入れへ乃めかくととなくなくも

こゝろあるあまにはあらざる露へしともみるに月もしらぬ
心もとなきはいまだこれほどのことはいへどけさうして
おほしめすこころはあらしとかこつ月ころいふらむ
われもおもひわびのこゝろにもいとゞはかなきさい
うらにいはんてもこそいふべくなむはかなき
ゆふべにはしたがひてやすくあはれとしていはん
しきしのびしきにたとへしなりにていたくはえ
わすれてく
よなよなみしかすがにすみかはあはれなる
あまの川わたりにこそあらめ

いとあはれにて見ことのねはこえ給へるたゞ
今まいりてこそいかにいひわけなくてすゝみなさに
まかせのうへ女いぬることゝに入よあはれあらう
わすれぬるを給ふ人といひておもふまゝにならし
なげきにこゝろへだてのみにあはれしはべりしかし
なかなるにひとへとなるにをのこのちぎりをまかせ
あらじてなどいふはしきにかへすやよろこびよし
なんおもひけりのおほせよ女
こひしきにあはれなるちぎりはおもひやる
まふいとあらそひたりしこそあさましよ

おなし

ころにおきまよはれてくれなゐの涙
きつゝとしも流とちさりそとこそあ

中興の近江乃すけかむすめもの〻けに
わつらひてしやうさう大とこをけんさにしけるほとに人
いひけりなほしもはたあらさりけりしのひてあ
りへし人のことものいひなとうたてあるによりなほ世に
へしと思ひいひてうせにけりくらまといふ所に
にこもりていみしうおこなひをりけりさすかにいみ
しうこひしうおほえけり京をおもひやりつゝよろ
つのこといとあはれにおほえておこなひけりなく〳〵
うちふしてかたはらを見けれはふみなむ見えける
なにそとおもひてとりて見れはこのわか思ふ
人の文なりかけることは
すみそめのくらまの山に入人は
たとる〳〵もかへりきなゝむ
とかけりいとあやしくたれしておこせつらむと
思ひをりもてくへきたよりもおほえすいとあや
しかりけれはまたひとりまとひきにけり
又山にいりにけりさておこせたりける

うくして思ひまよふ事しも此哥
うたつてなしあるいくひまよ乃辞
なし
此哥も見るに此遊に見ゆまてしつくしほとけ
なくあかりのことやはらかに此川也き
これんは無ろけ多文しやうさうちとく
まるゑんにてるき人をいふと此なりつる
斎乃川と あは此よりそやうつ成み斗
ともいはゆる此女いふ紛らうし川にきつしりんてる
かんたちめなといひ出つとみを此まんとてあはせ

此の字彼と此まいても此いおやここは深あら一
故兵部卿宮この女のこと聞てすまてつけける因
よろしいたつのみこ
あさきの葉乃そうくこそ見える川
風おしりに此わたつきさまそ
これも斎宮
あさくこそ人はみえけれ関川
たえゆるこそ心あらしとそ袖ぬれ
つるし
皆き川乃いは瀬とく紛ら川ぬけ

たえぬ色くろきみゆるさくはなは
こくてしこの女いてことのゆかえあはゆるすまじとありて
のまあらけまうみきこたゝしまうしなりけるを
月のいとあかきよるもあかれいよとおもひ京極
らふくにゆつくうしかしとけるふくて
けにて月といとおもしろき風さえ妹
このゝまつひるさくてあふさきかさまし給つりけるを
えさりつへかんをいふはる女のもとてこうかきけり
まちまちつかたに我のうち清あやまちに
おもしるてにすすきとなりて見えし
こうまうけるをとこしたのゆかくにつきつけたりける
ゆるしくこともこよひゆるへのかしひとへに
うち清きみやるかにこそおもひはへれ
とかん又この女
ひとつ衛にきこえしの孫むすめのこと
妹のむしのねにかくれて
とし
たくなはもつとおほつかなくもおもほゆる
祥きくつものいまはなけれは
又おなじ宮

雲井にそよそなるはいはみつゝねら
なかれしたふかれけるこゝろにま
うへし
なまめいつれも雑も雲井はみえけれ
いろけるを延つ比乃とこして
むかし家よりし女
あふすの稲ふふくつらにあらぬ我らは
みまにゐしとまれてしきる
南院のいまきみと云は右京のかみむねゆきのきみの
むすめなりけれはいはけなき時より内侍のかん殿
きこえけるにまゐりしたりけるを兵衛督のきみ
あやまちとやみえけん故上におほしくらはゐら
たえしおもふにまなはいとこなるのつゐるにつけて
うくたち
うれしけん又君のまとしみしところならは乃
稲も乃秋にかしとあへてはきしか葉
こたんなりけ留
おなし女なかとさうしなこうりて文のちにつゐて
まみれいてまいらのしらし志かにきといひなりきる
うりなりに

あつまりしつるかうしろやさきに参拝
くさに末れる津伊乃いのちい
おなし女人ふ
たかひるるくもしら浪なかる神無月
東しの嵐にもみちぬ過なり

大せんのこしきん式部むすめにて おほきの井といふ
所に住けり こゝはきこえつ文よかねのよしとて
ゆかりひとつ三年ありけるは 後清ちやうおほく
こゝ男なりけるこそ見えけれ 此男に思ひなん
すまさりけり 世はいかにとて 成りける

世中はいかにやいかにあらむとて 恋まさらん
ゆめかなしけれは 中納言兼輔男
おほかた女院に無清けるをかなしく見えて
せりけり風吹雨ふりける日かれてこふる
吉風は ちりしみ吹かれと 思ひくれしか

連歌師助之筆
一冊 数寄
大鬼の

大
十六二円

とよみ侍りける

兵部卿あきらのみこ源修河参のもとに人の侍りていふ

しのびさせ給ひて出けるを又ゆめにも見えければよみ侍りける

昔こそまれとすれ秋来をあかずしとよみに人は

兵部卿山常きゝつらむ

玉藤の花のほか見えぬ花ぞらり花山院の花

こゝろざしは忘れ出てさへ心にかゝりし

大君も見たるれ

ちゝにおもひしく人

女ともに浪の下草今はとて忘れける孫をみる

権の守くだりけるに人にあひたまへり

言問ひて尋ねきつる

袖よりもかへりて思ひ出れば人をおもひわすれ侍る

右近 かれかれになりにける時 小式部のみこ
　天暦に乳母 後撰作者

身よ人にも忘られし

桜花ちりぬとも忘れぬ心のうちに今もなほ思ひ出らるゝ

この歌

桜守花をとこそかれて秋の夕暮に

まじはりけむ むすめなどにて

なげくを見けるに世中と袖の涙を見てかりける

橘花みこゝろとねあり

露たけと萱の枝をまつらん岩まり雪のさかゆのこゑなく

閑院左大臣御返し　君

むかしを思ふ心ハありける海かみなとのかれハ子まて出て生を

むすめとなりける家ハこのうちにありし藤原の（奥戴従宗）かね（保忠男右大臣 良世也）

きゝてみそかにかよひけるをやもひいとゝくしれ

おとろかれけるをいそしたまはらんこそ

かくて情さかりとなりて年月をへてやまんとやとらう

こゝろはれしなりかはれりハきこゆるをかし

とかくにいひさをハいひそ思ひのあかれハとはれんとハせし

せくひとり名をかけてきこゆるけりの枝を見てなつかしさ

まやきむかしえあえまり名れハかくりにへりされあし

ゝ小男のもとへせらひたかきせしりける

腹ハあくゝ久紺れ絵おくにあらぬ様とそ鳴てあらし

たかいきゝみゆらし

あるさ丸稲荷のみてみせしかと屬よかく乱旅ハせさりしさ

御時きおとゝ（貞信公延喜十四年八月廿五日任右大臣）ハ右大臣にありけるとき（右のおほいまうちきみ）年比かよはし枇杷左

たきハ見てありけるにも左大臣にありし紙

うけの抄花よ御情さたとし梅とて見かさしゝあまりひく

なきく心くる上咲る梅花をみつ後とさし梅ありてさらん

こありつるきは白如事につけていつかふかゝりけれとさいゐあり　亦ハ寛平皇子
金子母同延長
女御はそれ三条の右のおほいとのゝ女はやそのなる
つまにてなむありける
いときよく年ごろよせたまひけれは北の方にてまいりけるをたのみたまひ
こありつるそはおほし新宰相のきみにてまつり
かくて枇杷のひとつはかりにて右の大臣中納言　清慎公
ありつゝ住侍りける枇杷大臣ひつかりつゐにおはしく
あるとくなりあそひける時に新宰相より
花かゝりけるは人にまさりとてありせなとておほしなりや
宮の枇杷むこにかむ貳といひける人をむすめの御もと

筆行者一むすめと枇杷の時はちくさ処々書てそつかはしける
この御つけ給ひは女
ちかく枇杷はことに菓のところの筆行者なとの御さきにこれらに
かゝるを賀にもちてまいりけるに瑠璃の君と云はし
まかりけるはいと御行院の殿上をすこしまかり出る
かはりのことよしとはいとあり日三年ほとにまかり
てあひうそのとしこのよつのおとしてかくれにけり出家
ことといひかりし宮のいまはこといゑんといひきにけるとき
きしれのりてなか
逢見ては別れことなれはやかくとなりて物はおもはさりまし

ゐしつゝこ
いなれしかりくて地と思へん名高くなくて秋ハなかしこ
こなむありけることと答へてなむかけりける也とすか
すゝきれ右やまさる人なんりとハ思ひけり
菓乃葉にかてかゝる露なりけるやつらくて涙ふりつゝん
本院の北方の（本書作枇杷）御まゝ帥大納言（権中納言敦忠 母ニ国経也 大納言）のめにていますかりけれ
平中かよみてやりけるかけり
春の野に人もかえりてつきて秋なきもなむつよくふえ
こよひかへりてみえてもなかりけり後
花に似ぬ北方の返し給へりける

いまそかりけるをやまひやと思ひて青き苔をなむおほやけ
にあまたなりけれなとしけるまに，いつみて
おほいとのにまうてたまへりける泉の大将故左のおほいとの（左ハ細之薨 右ハ右大将定国延喜六年薨）
まうて給へりけりほかにて酒なとまゐりゑひて
夜いたくふけてゆくりもなくものし給へり
おとゝおとろき給ていつくにものし給へるたよりにかあらむ
なと聞え給て御かうしあけさはくにみふのたゝみね
御供にありみはしのもとに松ともしなからひさまつきて御せうそこ申す
鵲のわたせる橋の霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ
となむのたまふと申すあるしのおほいとのいとあはれにおかしとおほして

しとおもひてきぬよひを夜おはみさまいりあるひ
ゑみまいらせ給ひねもすがらきこえかしこまりてゐたり
出家のむすめありとやすくあの人をむかえんといひ
なりといひよしにまかせとりなり男ありとも嫁なる
終しまりけるの程をきむ聟に下りなるやしみ
我宿此一村にきこえむすめにこきまいらせし重なの
こゝろむ後にかなかの夜ふけいはけちけれむすめなり
たむありきれ
流しみありなのひのこれのをといひけるはいそらきありせの
ゑりて世を過るの物まむすむかけの年月のくてゐ

ワ重きろとする人きしのわけれにありて家にやけ
かりのあまみれてなきに枝こなれいてのいふしう成
みなの草の重とてゑりて聖太武きてちけよそりなる
またる里の家のありてをゝ重をもてなしひるまの
をといひなむ人といふ人あるん治なみの位んとの終ん
出るる重なむ従しすはしし身体人をいひなあ
ある里の終きる終いして成よ久記そ暇との終
家の稲りかしらゑ名まとう家れなにかむしまん
あるあ中にれやうなる家小入なあの人ぬりく
出車るん此のれのをといひなりいそうありなれり

たもつてらハすれとふるにこそかくらんといふ也
うたの心ハ白川花にさかりをむかし成とけるを
こゝろへたかれハ叙りんきて見けるあとめの一かきそ林
ぬきんてたりとみなをし人の武のちからそ秋花
紅葉とよませ給へは
高松殿ハあそかの紅そ南の出てくる山のすちにむかへ
こ哉以の来のこうらさむとひてすねりのさあり
まりそよ人てうへきすゑとつ宗をせんとそかくいひける
わかうこのなをにうつしそるさ紙志つハ
いそすゑ給ふ事なり

林の色やうこに見る哉
とそつまりの事哉
はらすゐけ侍女京にいたることやりて読ける
人をまち宿ハなを見え成よなるまと月あはれならしねは
こゝろ悲のまことの家は
あはれかりすゝけれ女
林風のやつき花すれ吹なるかたとおもひてらん
先帝御時卯月つゝまちの日営れ有ぬと
よませ給ふ也
書ゝ催るえりを営れのこゝろつまとかをねなかミ

こゝろしみ〳〵宗祇
切紙ノ大事は此歌ニ極とめして月の心を思ひ
秘中にあるひとつありて月とるまていふ事ハ月ニ
のへそうれしくつゝよまる〳〵と能くまゝり〳〵つきえ
みえしつゝよ此ニは〳〵つゝ〳〵なつよまつたる
照月とらまことをいふとは山遠とをして見れ成たる
ろく小松わりしちにろつゝれ又
白雲のこのまにもれわかれる清風にそよつゝし
おほしまた光月のわかしろ秘みえの小にむ思あた
ちのいつきらし是残又あるの世つたるにゝ大忠阿

御ひたりうるふあるみえさらしよるれうらきひと
あそて来る女のかへきらけなるやうこんいふし
うなきたる又忠とちくめして又世行たる世ハかへ
と常れ記くいふしあてたてそかくうくそと又
此いろまとせは又此しいふしうわやうけるに忠
思福さ也かちハ是ねさあくと又かゝそ此わる世
とうたる世ハいそまたくみてぬもひ言う
先帝わいひまわる又さらしまきたるけるれわいふハ
是なるみ此にゆ残しく又その又して遠るら後と
人のまて世行られ言れゝめしなる花の行いはなる

かれのこ事ハなりもあやなくて逢そめて人と家とそ云
このわたせけるとワハのつらくて限なくあはれにおほえけまハ
思ひなけくおもらにさうんの給ひしと詞なり給ハむありけり
うけ給はりにてとひ出給へるかの
又おなじ三条右大臣(定方)のむすめつゝみの中納言(兼輔)にあひ
はじめけるあひだハくらのすけにて内の殿上をなむ
し給ける女ハあはむの心やなかりけむ心もゆかずなむ
いませりける男も宮仕へしけれハえつねにもえ
いませざりけるころこの女
さりけるの見ハおほかりしをハかなく〳〵給ける

殿上するをハよるもあそびきこえてすま男
日ごろあはれしれるを見まらうなかくいひさま
ありありくらふてえまゐりこゝに書とたえむハこそかこけり
あくる思ひ女まらでなりけるハ女
内くたちうせて物ハおまりつかいつけくこそもかきこん
こうじありけり
志賀の山こえのみちにいはといふ所に故兵部卿の宮(元良親王 陽成院皇子)家を
いとをかしうつくりて時々おはしましけりいと(子母 文叙 藤原遠長女)
しのびておはしまして志賀にまうづる女ども見給
時もおほかたもいとおもしろう家もいとをか

しうとむありけるかうしに三殿にまいりけるつ井
なとは家にきたりてみえ家のさきにまして
まいりはへりける
かの家にのを若きおとこのさき
こゝむかはは申さいみなそ
あやしきえこといふなる人かの人とおもひいれても申けり
まなかなこの下まてかれ三かかな衣は申侍
あかし女
今の世に今はかたて京は女かたし侍かの申
はやすとい人ははうけりむはてり侍

文徳の時は此書は清和の御時ゆへ中納言と
言ける人はしりえたる兵部卿の安子の男なり
一家とききてはなけるは茶香殿はとなりのなる
なむありけるたゝかたしきはへとありてゆく
物をとひたまひけるは是なりとひ此中納言の
君たちれなるへなしとききてたゝしまして
あらは此家なとしにみふけりけるは此女の事也
しるくかてもまゐりけり
人をとこ〈津の國菟原の郡あしやの里にしるよしして
いきてすみけりむかしの歌にあしやのなたのしほやきいとまなみ
つけのをくしもさゝすきにけり

けり後涼殿乃前れ梅ゝ香のかほりけるを
わりてわくらむさこしかれまいらせて
此女人をまりの蓋をかし白香れ清きそのへ以あらぬ思ふ
さえなむ此のけ香れとすれはけりいりのそらん
さそまいらせけり
右兵衛督の源雅大納言と成むすめすこしまいらせ
と出くのおりし雨ふりはあるそさきしみおましゝそれ
おほとのこうりのをしてみつ給ふ袖にほしうおり
まきをうりかへそおこまつりかのにほしに其
なをし袖いはつなもありやこうしそやし給てこその給

ありけれは此返ことに
其花の人をとりしうたに草稿ちりのことのちに持参しを
せありけるは此返ありし
草稿ちりのこりけるは我衣袂をうつしあれとまれ
こたへ給ひし文
草衣ひとつ給はれ袖かくは我まほる人ありしつる
とゝむれはまつけはなれりしましてうち給へぬをむ以て
その給けり此返ありし女
人まつくりこ后宮のつけ摘めりあそこ別たまつ
うしきてほひてうつ宇津のなりたまはれそうせ

いとくさかりけれはをかしのりてみはてゝかり
女はゆゑこゑすくなりけりそのめあひてらるゝ
夜の間にかれ見よとひとりくいとらく恋ひくゆかなくなり
かくれは男はなくてかしこに人の国のありきなるは
御むすめのむすめ見ゆるけれはめもかのいとく男
恋ひわたりつきをと人のまこゝろかへはきまはい致りけれ
懸文出て月はまた守は筆つとしとてむかへはまいりて
こゝろむかしはさかすれと見えのめてをかれ人の重なれはとこ
まいらそのころを見えてかれをもいつうかゝるか
かく男すゝむるを得すてこの男かれ人のもかれとかゝれ

いまくるかたいかはかなのかれをとはりすきは男女こと
人はわりいはつかきてすれ人とまれとつまそつ世の
これ宗生は
花すき衣のかもかそなむかと思ひはいかにかはいまけさは
とろひにひらかはやる男をありそり世中へうし
あはは男せしるかいひけりのるんは男とやうく
思ひやつきこゝろしこのかたこれもまゝをして心のこの
りそのかれゆくえをるんはいさいむすゝくとこそり
心は人生は示けり
身をうしと思ふのあはねや人と哀と思ひもしらん

こゝにかりすゝ深き心なくてハ此心なくかく
哀なれハ心もあはれと思ひけりなとこゝハ人かるなり
三郎ハよき御男とも出こむとあはするにかの夢に叙する
なるこゝろ三郎ハいまけると男の心よみ三郎ん
こゝろそなるむやうけるも此めるんもつゝりにあり
まるほと三郎ハかくていく事とあはれするとおもひけり
たゝれともろうにいはれしむ母まの世るゝ
男もきゝてみむとはさうハたゝこゝまハいとあはれと恨よ
ありけん事とはへるこゝろくはとかて母に會まハ
男もせつそくハ相まるしむとて車にありぬ三郎連て

とて年もせおりてかけり母にわりなるまんめつる人あ
くまをまむしりそきて供かくのこるをかりける
物をこゝにあひ人とめ波乃上と思ひけれと此ちまそ
此皆こゝ在五中将ハ業平男も件のしのうひにはくめらかれ
なりみれ出てハ見るハまそ兄事しせと車ハ母也をと
人くえハいると母に會する人ハ車をえうとそおりそを
かし出てこれもハ心残くかるまに降へちかへく
なりもそ見を三郎ハ心也のまし おもひけり
右ハ見え乃いかの稀けれハこゝにあるかゝむしいそらて
去てミよふ縁をえれにこしもとら人のゝをまゝわりもと海

されたりむかしはいますかりけるにこそしなおやはかなき物
絶えぬ物をまてけれはてまつりける歌はいひおくれ
うちなる人かけもみえす何ともおもはてなかれてみえさりけるは
ありける人なむ宿木の経きかかれしとなむいひけれはけさみの
言ひよみかまへひたりけるかの花をかはかくうつ
うちは昔此殿の宮すむ世は一条殿にて行なるせうしや
此よみ給ひけれはこそしつきにかへしにて手つからあり
出はまち物人をまちてなむかきたれと在中せきたり
女といひしる歌井ゐかしてたれ給へきらしあるすこれてくは
在中将の給ひと歌をいひ家ははせめて後てかへり母

といひやりける
思へともこの人とまもはつまかれとや人思ひなからむ
此たかいひとりくれとはいたうなりかくいひたる歌
又人は歌をみ男あらせんといふ人なれと一生に男せて色み
なむといまもとしてりふいひなりさいひなまたらく
男もせて二十九にてなむ人の御はなれたりけり
昔在中将のみむまこ在次君といふかめなる人なむ母
ありける女は山蔭の中納言の人むすめなりけるか家
若ことなんいひける段さて君のもとにもあれ給ひ与
ありける時にいますかりけるを此の人さりけるにしにされせう

このさい宮は文徳の御むすめこれたかのみこの
いもうと也此男は業平なりこれも又あひて御ゆるし
ありけるに後は出しは女のかたよりも
高子と思ひ業平もさいくうの跡をこそなけれ
こそ後よりけり今はみなる業平に行にいりけり也
此業平は業平中将のあつまよりまゐりけるやうにて
これにも人の国よりかへりしとて御たつね
ありし人の御かたみにありしとそ
はるの人そかくさつけることにしけるに松のむすめやと
いふは海辺によるひとけるにそ人そかれ行けり

むかしおとこ人やみなと生年まつの海つきに流れの中にと
みそのえれ里とよむまやなく
花さくは紅花と絶え松のかよひかれにしさは知りそうかう
こゝろへつゝありけるにてし人の国よりくしこれ
かいの国にてをそ行の松に登りしてあはれなく
ゝ人まうて
ありそめのけりかいらころ思ふしと今はかなしみれかたくなる
これらいゝそむしになり
此業平君をなきものにくしてあはれかなる人今はの国
かのありしそ此むまやもとに身よりて此たひの旅

又そよ色又しるしまうけ出はへらさへきれしてハあまれ
とおりハ常季
亭子院人々花川あるよおりしなりうるれなまある
といふものありさまに依りて候ハまいりく
何ぞ梅かんちうる紋上人今ころほまこ梅ハ給
候ハ志りに三郷く何事梅うう候ふ何事梅る
あきれてまうたるを入れ候ハすらう候て出けり
大原ありう三むひう給ふる名れハ雲く色とあるとる
こと人々色名れハぞとしうきそ給てうけわるる
今ころよ守まう抱くハ前にか刻ひうるまう

かいふ言をこへ人々入ちう斎あるを名し
亭子院人々花為うひへの流りにおりしまうにたり出
いひとハありへ何りはまりおうかれちをもわまこま
ゆりれきを挿ふ中まこ気おりしあくうわうめハ
給やとも名給まうる出めハハやう大江のことま
為ちうむすみと云りのうんちうしまうる給へ
中か出ハ人名色とまこま業らを出きるけあうけ出
大わまれうく給くめしあけ治ぞ色く命をおもく
名給ひ云うハと云郷とまくにきうまうさんみ
あるこ色く命をとめこうとハおりくれんとお何せうまへ

なかれたりける
朝みとりかひある春にあひぬれは霞ならねとたちのほりけり
とよむ時に帝のゝしりあはれかり給ひて御しほ
たれ給ふ人々もよくゑひたる程にてゑひなきいと
になくす帝御うちき一かさねはかまたまふありとある
上達部みこたち四位五位これにものぬきてとらせさらむ
ものは座よりたちねとのたまひけれはかたはしより
上下みなかつけたれはかつきあまりてふたまはかり
つみてそおきたりけるかくてかへり給ふとて南院七郎君
是忠親王之
京極不見
といふ人ありけりそれなむこのうかれめのすむあたりに家作

りて住とききこしめしてそれになむのたまひあつけゝる
かれか申さむ事院に奏せよ院よりたまはせむものも
彼七郎君かりつかはさむすへてかれにわひしきめな
見せそと仰られけれはつねになむとふらひかへりみける
昔津の国にすむ女ありけりそれをよはふ男二人
なむありけるひとりはその国にすむ男姓はうはらに
なむありけるいまひとりは和泉国の人になむありける
姓はちぬとなむいひけるかくてその男ともとしよはひ
かほかたち人のほとたゝおなしはかりなむありける心
さしのまさらむにこそはあはめとおもふに心さしの程たゝおなし

やうなりけれハもろこしのきさきのひめぬ抱てすれたきく
おもひやるとこそまことにかくるかの女
思ひぬけ人見へ見しと見えつゝすハいさまくたち
まし給へとて何時見し月日を家の門に立て
しりにへ見しと見えし人はいふ事をありしを
如此なれとおもやうなりし事ハいふ物ありしもけれと
分てよりそしそそり秋のはてのつくみなしさてこし
月とて人見るけさいかゆみたまさへもいせとも
新なりしにあひなハつまにひとつあるひハ絶なんとて
女かほときさかりて人の心何し見れおなしやうなる

にほひ思ふ心ひめのきみハいにすへて家とはいふすらのとも
いく田川の流に女郎花のとうらそのふしそう見とも
ハうれしかるハ人としとのハみやりて秋の云やうなれ
も見えしのたすしやうる也しとかるにほひあらん
思ひいつハいへそ見こゝろまことを秋比事とこそてんか
ハ云なほ来やうつすゝ人ありけりハかるすそ乃
いふなりけるすしこれもつきていとゝきかさなりと
又何といとかしこくるこころハあへりやさんと思ふまゝ
ほやうハこの川に字に絶の水鳥とてきまへるれとい
あれさまたん人みしそもつてんと云何ゆへこのしれ事

なりといひく菟原の里ハかしられたることをいへり
ゆかりハおのことゝかけるにあらず菟原とかくる所にあり
又女思ひけるやうく
彼のゐの我思ひけるは津の国菟原の男は為のこ成る
こゝろそはゆかりハ川のなかく流れハつきせぬ
ものゝ数ならぬをなにの為ゞ摂津の国の男貴
きやむすめかはゆかりハあらしといへ
つま恋しりハなとゝいへて菟原の人のある数へと
しくは流れ行くてゆかしあて菟原のさきにて為
を男にて数にもきゝ成りけり女は流れのことの（あるに）
万葉集長歌　とゝつけ中に

又流れのとをもつくりてかりうらむ摂津国芦男に数の（流れのとを流れのことをかへて紀の有常）
ことやうかましく国芦男とうかましあらハせなき国
の人芦いりては此もの大きとハ月へきかいたく
さまも何様和泉紀の数芦芦国の
君と兵まてにしてちくにもそきいてかんつまに
うゝそ浮の男は女の流れハ中にて有る
なむ男に流れのこといまにあらむ書まいその
母かまくれかと絵にふ書かことにそ流れ
人芦ものかゝはこれのうへ人をき人（きこく）此人
万葉集おく稿連　忠斎集中　流れの芦らしけり　とらみ　おとにけらし
ありそら人つけり伊勢物語にやも所男のつらく

影とのゝくらゐ下りんたのひられたむるにてはへりもの
女になりて女一の人と
張りて申しよう我むかは猶も人よ見らんぬ物かは
又 宍
侍つく小のむとかとかむらうこと申すこと見れは有く
兵衛殿と兩婦
流の事かあはれそと契りのあまて八人よ入よまて物かう
花のむ殿前関
かちまけもなくてやうそん者よりも思ふかな申しは前とて
花のまゝれ尤女小なりく

又
あまつと殿のつまをよ行ひ三すてぬとすそのすこさ
あかし殿すけそんとへみちきねと申す男は永く影とすへけ
又 つまへいうかはねとこみゆりく
おすえにすめは下うちのうの中るはと府と我のこちそら見ん
色し 女
うれけはりうかうこと大なるこは後契ぬゐのゝまゝしつゝ八
又 影のと殿 男になりく
我殿と契ちゝ小わかれし見そ行は無しきみさは見と思
なをしや男は人を行ちとかかかれと契てかりきしぬへく候

なかりしをひとつ塚にやまとよりきたりと入て
そうらにかゝる夜なかはれなかりける歌よみやありけん
さきをせしまへまけるほどはつのまとなをとさうとぞいひける
ある旅人この塚のもとにやどりけるに人のいさかひ
ひするおとのしけれはみせけれとさることもなかりけり
りけれはあやしとおもひつゝねふりたるに
ちにまみれたる男まへにきてひさまつきて我かたきに
せめられてわひにて侍り御はかししはしかしたまはらんねた
きもののむくいしはへらんといふにおそろしとおもへとかしてけり
おとろきてゆめにやあらんとおもへと
太刀はまことにとらせ
てかくなりてきけはいみしうさきのことくいさ
かふなりしはしありてはしめの男きていみしう
よろこひて御とくにとしころねたきものうちころし
侍ぬいまよりはなかきおほんまもりとなるへき
とてこの事のはしめよりかたるいとむくつ
けしとおもへとめつらしきことなれはとひきく
ほとに夜もあけにけれは人もなしあしたにみれは
つかのもとにちなとなかれたりけりたちにも
ちつきてなんありけるいとうとましく
おほゆることなれと人のいひけるまゝなり
津の国のなにはのわたりに家してすむ人あり

家をなむしてすみけるこしはらけつ女も男もいと下すに
はあらさりけれと年比ころへわたらひなともいとわろくなりて
て家もこほれつかふ人なともとくあるかたへゆき
わかれなとしてたゝふたりすむにさすかに下すにしあらねは人に
やとはれつかはれもせすいとわひしかりけるまゝに思ひ
わつらひてふたりいひけるやうなをいとかうわひしく
てはえあらし男はかくてのみいかてか見すてんと
いひけれは女はおのれもかくてのみいますかいとかなしき
すそとていかてか男ををきてはゆかんといひけれは
またいかてかくてあらんといひて女はかくなん

いとかなしき京にのほりて宮つかへをせよよろしき
やうにならは我をもとふらへおのれも人のことになりなは
かならすとふらはんなとなく〳〵いひちきりて
たよりの人をたつねて女は京にきにけりさたかに
いつくともなくてきたれはこのある人のもとに
たちよりて宮つかへをしけるほとにまたなにことも
なくてすみけれはこの人の女になりにけり
津の国のなにはのわたりをおもひ
いてゝありけれはかなしくて
むかしのこともいかならんと思ひてまかりけるに
このしたしき人にいひて女はなにはへなむ
まうてけるにある人

侍んとするにこの小宮こもりまし宮つかへしめ
侍く給ふさるへきうけ給はりし事ありと
するゝて御かたはらにてさきうけ給はらてたゆ
小さき男たえ此伊勢の国とかくれもなきとも
あるしを思ひかけぬ女人々の文ども見るも
けしきハさる人をきこえさせ給ひいはまし
なりけるものしける事ハ人のみちをつたへしは
見てもいと御心つくしわれとの思ひかけ
あたはりこの宮つかへする事小方にせよとて
たまひける人とおもはゞ侍ふたもへといへるす中み

これ人と思ふ女まいりぬ思ひつゝたにたゝかゝる事あり
ねよともまうてくさうけれわかうらにかく人しきを
思ふてをはけるむまをけるいかさんねんかしらやあ
らしくてやかはせまつる事ね見えてとはんとを
すゝく此事をとすれとうんそれまて男すてゝうんそ
あつき後うつゝそれなきと給へしはあまりうに給
こそあるね御事はたゝ小さひゝろやいせの国と
云いそれたしけるのみいつそ那波あるへしかそうまへん
此き色れはいてくれ事と見るつゝ小といひくるは
すこ小かゝあし気まひぞこのきるまうんといひ

さ出ちていみなりなかにくみえへしてゆくらんとすら
はしけるかにみるへきまゐらんあらそいまゐすらし
ごやせかくやれしとひて此事と申せて家ならし
まりとみゆる申てはし人をはしてけるへいふな
ませとさるしう思ふるにゆかへるえゆうたへきされ
ゆきしむなもしきすへかしかてせ後殿は人ことゝ
まかしれた最なれ事ともそしなるむかしまこの
人は日ごろあへしとて此事うるむてんとひあり
云ふしといふ様とはしいまひるる男のよひのやう
なる此事のまへよりいはれたりこ世ゝかれとえぬるにう

なん人とゆへくてはらもいふてしきさ後る世ところ男よ
にけりこ世とみえそらくみえゆしさて此あしから
こはにすのことゝ世よこれありつむしとらへせかのはら
かえんといはせなりけるなれは開るれ物へはへなてとは思
言れと声はかくもへ事る世はらへ入るう字事なりと
ちくにゆるひらせ事男よみむしくといゝくた此男れはと
ちくみるにきれる世なりいはれかるれりかなほ物あさ
おはしく世小事の人のるんといふむてなれは世はうて
乎人は成天ゝとは世とあられりとゝ見ん思はなかく
此あり男なりける物るをなそ世よともはいと世見あし

ゆあらむとこゝろせりとおもひなは、すゝろなるものゝ
なふものゝたらてみしつるをある人〳〵いなけ
人云あそむ見いひにくてしそ物をこそせん此男
あはれとおもふにすまれしつえ海ゐやまたりけれは
もりいやのふうりおやしさよりかてめえつくよ
かゝをも見しられたりけり思ふにありしあをせてのゝ
さゝのはかこ家あるなるを思ふるにいとかなした
なくてあしをうりすてゝけりまに家てたり見えなし
かいるをかれと人これに見にけ入てかま給ふ今り
年へてありけるこの車なる絵せたまこと

かそこそいひかれえこそ此人もをあはれてたゝは
えいれなり人はこゝの家かりもむね給なりとこそいへいせ男
ふかくおほせことあまりあまのするなりなふのうちひを
をもゝをきたとりとも物をこふなまいせんとすれは
ゐにものゝたま給すえ見とおひたてそとをきつれ
君を見てはちりけるも思ひはいひし京の浦を住るさ
こゝのそふ思ひてこれと同車にかれと云なれはかみさと
思ひそきこえそもつるあちのこ今さうなるし
わすとそなれなえもはしらいひこえ思ひける物
なりと車にもけるものゝ給はれはそそ人あるを物に

くらくやりけれはうしろめたく思ひて後にはいかて殿にてそ
あはれとなんある人に別れにけれは其後は住けり

昔大和国かつらきの郡に住男女ありけり此女かほかたち
いときよらなり年比思ひかはしてすむにこの
女いとわろくなりにけれは思ひわつらひてかきりなく
思ひなからめをまうけてけり此今のめはとみたる女
になんありけることに思はねといけはいみしういたはり
身のさうそくもいときよらにせさせけりかくにきはは
しき所にならひてきたれはこの女いとわろけに
てゐてかくほかにありけとさらにねたけにも見えす
なとあれはいとあはれと思ひけり心ちにはかきりなく
ねたく心うく思ふをしのふるになんありけるとまり
なんと思ふ夜もなほいねといひけれはわかかくありき
するをねたまてほかに心さしなとあるにやあらんさる
わさせすはうらむる事もありなんなと心のうちに思ひけり
さていてていくと見えてせんさいの中にかくれて男やく
ると見れははしにいてゐて月のいといみしうおもしろ
きにかしらかいけつりなとしてをり夜ふくるまてねす
いといたううちなけきてなかめけれは人まつなめり
と見るにつかふ人の前なりけるに云ける

風吹けハおきつ白浪たつた山よはにや君かひとりこゆらん
とよみけれハまことにうへと思ひてかのをとこはすてす
うなゐの比のつまの女の家ハ高安山のふもとにありけり
むかしなけれはいとたゝ人よりもいやしき女なりしかと
帰てみるに余りよろこひて入てもしたしきまいらせすなる
あやしいふすかたのおもひをそたゝ見えねは何ぞ見えん
いまあはれなりし女はなにとそ文をもいひやるを入れは
いとおしくて母(?)にいはれしかはいと頼もしき君なり
わかれハ兄(?)きまゝもさりとて今もなかれなはむもたれなら
わくてわか人を何にかはいそれとみえさりてて月
日
おほくへておはりのやうつゐるまてかゝるをと女をも
思ひてもそれいとし参りまいりたるをみてかくこそあると
いかゝみならむと思ひてもおはしぬ女の覚いたう
なくなりしくいつきりなれは津まし見えなかりけり
言ありきそれかいまめき我かはらくれてみえすしりそいそ
あやし参さまたゆきかをこそれおほくしとはら
くにゝきしけくおもてまつりつねかりと見なら
とていかうしと思ひてさうなるまにはいかつまなさなり
これ扨こにはおほす君かな
昔男ありけり人のもとにゆきてまかりて様なれはなかりかな

ゝ此いさしうきよりみて人〳〵よろひ殺上人ゝを
もらえひ給ひとあまた河のなかゝりあるゝは今此
とゝかゝりて後ゝあまたもかくすん思ひしてもまつり
帝に人丸そなしてのちさ後みてかさき宋
出は是さりすくなしと思ひたり よの御字み
からそ其後に帝し見まうし竜田給ひけれ
門はおりるを見るしておはせす河とつはあり
又よそもつて紙なき御まへきかしのみ礼ない
又その生まゝ河つこいの池ありあとるなけれなかりては
其ともみれは見えありしかさゝ里たりとせ事

其時御ともにありける人丸 其そのしたは今はさきこうかし
てみかとの御ことにあかれたりけるに池にさけりて猿沢
みたれしけて人にも言ふまとの命
柿本人丸
わきもこかねくたれかみを猿沢の池の玉もとみるそかなしき
とよみ給こゐ人丸也
猿沢の池は池しほにみそきてうねめの身をなけし
ことよみ給わきとて 此池のりたえかへる御
たゝしもりけるとうかせ
たつ人みて龍田川の紅葉はなかれりるきとれ

読して家々日本まで
高川の合ち崇なる神なれ共三宝おいて河辺なりし
みかど
ゑびすの縁覚さらされて本地は錦中や絶えん
こそありけりまゐりける
船人きかかりかゝりしかはこれをたましひの分なれ
舟いそぎの海のへ走る坊は以前のこゝろ
こゝろの出はにいそがはしくおとんを鷲にたのむなり
身残るいそとさんは家のまゐりのうちとかの身なり
心ありてありけりの院のまゐりの給ひの大納言ありけり

帝きこしめしてなくみのこ出とありけれはまいりには
給はり祢いそきこしめしそうし給へるのこゝろさきをもと
まとりてりやしかるに鬼大臣を山へにゐておはしけれ
りとなる出と院の不思議あやしき事はにさ人
海とひかりきち給へとかなしうして事とそうせらく
ありしきゆのへなれし二つの方に御寺を隠ぐせありけ
かしこにせんそて内にまゐりて院のはかのことなう
ところし給ひて河えひて鳴きこしめしきこえけ
院のありやあんとそ又そうし給ひて男とのこと
ありて後て物とのこゝとまゐりす条井くしとおなれ

そうするにおもてをのみまもらせ給ひてかしこ
まりていますかりて此御鷹のもとむるに侍らぬ事を
いかさまにかしはへらむなとかおほせこともたまはぬと
そうし給ふ時にみかと
いはておもふそいふにまさりける
このはかりのたまはせてこと事ものたまは
さりけりみ心にいといふかひなくおしくおほさるゝ
なむありけるこれをなむ世中の人もとをはとかくつけ
ける もとはかくのみなむありける
清和天皇
水のをのみかとのみかとにおはしましける時さふらひ

坊よりまかりてまうてたりけるに
人はみな花のころもになりぬなりこけのたもとよかはき
たにせよ
[illegible]
大和国なりける人のむすめいときよらにてありけるを
京よりきたりける男のかいまみてみけるに
いとをかしけなりけれはぬすみてかきいたきて
馬にうちのせてにけていにけり
いとあさましうおそろしう思ひけり
日くれて立田山にやとりぬ草の中にあふりを
ときしきて女をいたきてふせり女おそろしと思ふ事

かきりなしと思ひて男のものいへといらへもせて
なきけれは男
たかみそきゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへてなく
女返し
竜田川いはねをさしてゆく水のゆくゑもしらぬわかことやなく
とよみてしにけりいとあさましくて男いたきもちて
なむなきける
昔大納言の女いとうつくしくてもちたまうたりけるを
みかとにたてまつらんとてかしつきたまひけるを
殿にちかうつかうまつりける内舎人にてありける人
いかてか見けむこのむすめを見てけりかほかたちのいと
うつくしけなるを見てよろつの事おほえす心に
かゝりて夜ひるいとわひしくやまひになりて
おほえけれはせちにきこえさすへき事なんあると
いひわたりけれはあやしなに事そといひていてたりける
をさる心まうけしてゆくりもなくかきいたきて
むまにのせてみちのくの国へ夜ともいはす
ひるともいはすにけていにけりあさかのこほりあさか山
といふ所に庵をつくりて此女をすへて里に出つゝ
物なとはもとめてきつゝくはせて年月をへてありへ

なりけり此男ハ女を里に出物もとめて山中に
ゐてゆきて里ハ物もとめてかくて年月をへけるま
まにこのたびハ物もとめに出にけるまゝに三四日
きたらざりける程ハ物まちわびて立出て山の井にいきて影を
見けれハわが有しかたちにもあらずあやしきやう
になりにけり鏡もなけれハかほのなりたらんやうも
しらでありけるに俄に見れハいとおそろしげ
なりけれハいとはづかしと思ひてさて読ける
浅香山かげさへ見ゆる山の井のあさくハ人を思ふものかハ
と読て木にかきつけていほにきて死けり男もの

より帰て見るに此女ハしにてふせりけれハいとあさまし
かりけり山の井なりける歌を見てかへりきてこれ
を思ひ死にかたはらにふせりてしにけり世のふる事
になんありける
信濃国さらしなといふ所に男すみけり若き時に親
ハ死にけれハをはなん親のごとくにわかくより
あひそひてあるに此妻の心いとうき事おほくて
しうとめの老かゞまりてゐたるをつねににくみつゝ男にも
此をばのみこゝろのさがなくあしき事をいひきかせ
けれハむかしのごとくにもあらずおろかなる事おほく此をばの

はなはたおいてふたへにゐたりけりこれをなほこのよめ
おほくうとんそわつらひぬところせかり
ていままてしなぬことゝ思ひてよからぬことをいひつゝもて
いましてふかき山にすてたうひてよとのみせめけれは
せめられわひてさしてんと思ひなりぬ月のいとあかき
夜おうなともいさたまへてらにたうときわさすなる
見せたてまつらんといひけれはかきりなくよろこひて
おはれにけりたかき山のふもとに住けれはその山にはるはると
いりてたかき山のみねのおりくへくもあらぬにおきて
にけてきぬやゝといへといらへもせてにけて家にきて

思ひをるにいひはらたちけるをりははらたちてかくしつれ
と年比おやのことやしなひつゝあひそひにけれはいと
かなしくおほえけり此山のうへより月もいと
かきりなくあかくいてたるをなかめて夜ひとよ
ねもねられすかなしくおほえけれはかくよみたりける
我心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月を見て
とよみてなん又いきてむかへもてきにける
それよりのちなんをはすて山といひけるなくさめかたしとはこれかよし
になんありける
下野国に男女住わたりけり年比住けり

男女まうけてつかうまつりし家にまうけ物にしても
いかなる事ありけるにかはなれていくへうしと思へ
とうせまかりけるに女たちありけるのことを家
りていかなるものかたりかはむかし母のとうけんなりたる
うきとは男のすずまうじていひたるははかなひ
なりそこなる母とかへりしにこそありけはわかれて
女ありひけるきしうもいまはこしにみえまかりし
かといひける事はかなしそのこころはかれとはせずと
もはらひけるをいひけりめしてこせらるここちなりんな
かくれやみはいつも又給ひしかとて気色ありて中せよ

れていひけるはいつもよくかくれんといひけるいつもこゝへ
母も御ぬれまいらせもみえてかつわいれ帯をして見るん
こかせとひける事は男にいひけるに給ふのかなあらんとも
男なくしてもかなしみ給ひてかんとくれかつてこれを見
あくるとをせでにもひたくにこれ
女をこの子で男女ありけるに月のうたなくて思
て行くとのちによしとも女とえてかの行事かてごれ
家ありけるにかかぬもへていぞて行ぞ秋ぞはつよ
うちにをいそしをとおりへとまくみいのてかうまどゝ秋
はなしをありるかながらえかくしもてたけはとゆるるなれなか

物をいふ人すかりける色をこのむ男すゑまうやう
こゝにひとりいまハ此事といふ人〈宗〉里ハ此麻ねすくハ
すなはちを云られしさすけ給はとうへなりおはしませ
うきをいひしかはいひ給へられハ女をいふ人の字
我をおもひても人へ立られしとこそ参えたまのをこえけ
こゝにみゆるハさとハ給りありしめえてはつきの女をハ送
てなかりてくるしすこしまいりこまう
漂泊る内侍と云ハきこえうれをしりけれなとを
典侍国香卿
近院右大臣 能有 文徳源氏
此ハうまいしえんし佳給ひうちとらく〈云〉給ハ
はうちとなくしおもてきこえ給ひふかやうことをはな

つゝみける人はくもゐなるのちもかれおやとやうしへきこえ
きこえしを思ひしとさてかくものことまをせねえまうえ給ふ
まうねゆさめうらみ給ひてんとおもそそまうづ宮えん
おとにほまけり
雲ゐなるやなえおもひ人もまたともとへ年のへぬれハ
こうむけるきまつりきこえ
おなし内侍のもと中ねんとる中ねのかへ人
て見りきこえ
秋萩を色とる風の吹ぬれハ人の心もうたかはれけり
とありけれはかへし

秋の野を分行風はひらけぬとてへいのうちし葉をまねは
こゝむそうけるかくそすまになりて後中将なれりて
らりきみえしみれてにほしららちなみへちと
すり人なくていとまれしくむかし杯すりして
みもとて母とかりそれは内侍にはあめをふてあめ
大あさに成ある人言ありてまいらせてけるに麻を給ひ
とむかいはいやありける在中ね
なりけるに何とも思ふ給てはしれ思ひにん人をめさとなん
こすんいひあれ
在中ね二条の后の家まで人をつかはしまいり

なさちえ年て人をたりしまし侍りふらそへ
しそもらりけり何ともし来りとして拠とおこせそかくらん
思ひ行ふむかし宮のすんいひさ枕ろは袖とていて
こすむねこもらけるもしと人すんてすれまかりけふく
きさいの家業平女はなきこそ在原業平まうそ給
宰りにてゝも数上人ておはし侍りけまらり
なり在中ねをつまふまり侍りてまなりま
なり業平りて年そらり法私それはいゝくしく
ちてかを後うりてり御車のそりうちまれなければ
見はうりきさ弱きあるりなり在中ね身を侍ちてみ

大原やをしほの山もけふこそハ神代の事も思ひいつらめ
こゝろにもかなしとや思ひ　おもてとしれた
ほしきかの又在中将内にさふらふに御息所の御かたより
わすれ草をなむこれハなにとかいふとて給へりけれ
は中将
忘草おふる野へとハ見るらめとこはしのふなりのちも
たのまむ　おなし草を忍ふ草忘草といへハそれ
によりてなむよみたりける
在中将にきさいの宮より菊めしけれは奉りけるついてに
うゑしうゑは秋なき時やさかさらん花こそちらめ根さへかれめや

とかいつけて奉りける
在中将のもとに人のかさりちまきをこせたりける
返事にかくいひやりける
あやめかり君ハぬまにそまとひける我ハ野に出てかるそわひしき
とてきしをなむやりける
水尾の御時左大弁の女の弁のみやす所とていま
すかりけるを帝御くしおろし給て後にひとりいますかりけるを
在中将しのひてかよひけり　中将やまひいとおもく
してわつらひけるをもとのめともゝありけれハ
これハいとしのひてある事なれハえいきてもとふらひ給はす

きのひゝくりるむしこゑなる事は小あるなりけり
みこえね日まんおりけのやまのをいてなりてさの日よ
歌よなり中ねおきそれなり
活生しゝいき作し表はなり三よをなりてや
これとこゑやうしく歌なりそへ入そつくるるとさえ表
歌を事あをせんとすれ程よ宗なりとやすくいとつを
しゐなりそゝるむとゆうてつまくくとなりて謂なりなり
（信勢）はるふりたとハ云ひそ文しと所なりとハおてハなりけりと
としくる母や母ええそりなれ
世中ね歌もの乃よ出て女乃なしれつ事れなりとに云

ぬ下すされつゝ天あめのしも女れ雨いとらく見えなり物をと
いひつりしなり三おくれはあかりてかくしゝふかくしく人くく
やすまれ
又そまれつゝを不せ人党意まあやすくなりや詠なりむ
こゝあ鬼ハ女る
（此是ハ鬼神也神の心）不見鬼神と云ものゝ意をあはつるこそはれる事のなりや
とそゝなりこ鬼ハ物なりて世にある事とそう
男女乃こゝろをとりさそいまおものりハすこしれ小
又をも此こゝみとも分やりくるしとこすとそう鬼と
（武）（猛）（鬼）きりしかりまとらへてなことを人党国よいうろなり

尽なのを給てしなをけりはなそ何ゝ女のもとにいひ
やりける
いつやきし人みなそせるめ秋称かにあれはことき書すそいく
深草のみかとゝ申ける御時良少将と云人いみしき時にて
ありけりいと色このみになむありける女おなしうちに
ありけりこよひかならすあはむとちきりける夜ありけり女
いたうけさうしてまちけるにおともせすめをさましてよ
やふけぬらんと思ふ程に時申すをきけは丑三と申
しけるをきゝておとこのもとにふと云やりける
人心うしみつ今はたのましよ

といひやりけれはおとろきて
夢に見ゆやとねそすきにける
とそ付てやりけるしはしと思ひてうちやすみ
けるほとにねすくしけるになむありけるかくて世にも
いみしうおほえありつかうまつるみかとかきりなく
おほされてあるほとにこのみかとうせ給ひにけり 嘉祥三年三月廿一崩清涼殿
同廿五日葬山城深草
葬の夜御ともにみな人山陵アリつかうまつりける中にその
夜よりこの良少将うせにけりともたちもめも
こそもとめけれかひなくてこのとしをへて
すてゝ法師にやなりにけん身をやなけけんとて

まうりたりて侍てなむあはきこえ給へるなり
をうけたまはるへしと思ふは母君にていましける
あはれなることをは侍らさいますらはねらひきこえ
しつかにを忘くせさせむの仏神に祈をかけて
まうへと常にてきこえすめは三人なむありけると
ちうしく思ひ給ふるはたゞ後世をしとも母思ふ
此常世ゐるいひ給ひかたらひ思ひてことなるを
あかそへならひはりも侍従事しれせより
なりける事をかけていふをもいましとおもふ
ゐし昔のかくて侍りまし来るちの(?)れん

ものにふにて候ひなむとうかひゐるこそかくも
あまたかへる思ふて侍りける事れいまし(?)さ
そ後にかりのゐてたれにて世をのかせみそかり
けうまくてまかりこのかねは浮しみかうてみの一
とらせせ給ふせへいをたこうへあはきてならせ給
聟にあこえゆ福ならむさけらゆねち
上のそれこうえてこれ女かうしにいやうこの人
めくらうしうといふてなしにあ物まつ今一つひ
あひそせつまへ力をうけ給ふうをのなりはうのた
ゐし給ひてうまんちやうこそは人をおえあらんやう

と思ひてみれはやすくせうまいらせんといひて我
さうらふ所へ参ていはく、あらましくすゝやうしかう
ちかきにありとてなれはうちしめは、行人見ん
まいらせすへきとかたりなからも人をかくし
はしのはしをくらをともちてすゝやすゝとなかは
へをきたりてなかくかゝし来事かさねてすえしを
やさまはしやうひ思ひけれはありけるへしくつねく
衆ひとしあきなりしくらはのことれをなくし
まゐらせてきこえるにそいらしにそへらしいりされし
移りてなれなりし如くの又見えは藏をうるにもは淑

花のむかしにはちかきすことゝ見ても見ゆむかしけりとそ云
宣房卿わかれえうしを出ぬへきなりせしを思
いひ出よりて出なきかせとかさてもいはくなりぬ
ゆふけぬるさまをとろひけ花散上人ゐ房にいりいて出ありて
をとはのとてやうるいかなにはもかしみれはなにはけるを
とをそきてはいへりて又見えは
今の人は花の麗をなくさみけれはかゝりけれはとて色せて
これのみ又見えは哀のあるはかなしく人とすゝりてかくて
ひとくもてなし人とせのいはもかなしむりさかりとりは法師
なれとみたくしとはこなれそうなむ今日の人こそありけれ

何もとめて又ふつのあんとて侍るうえ志をかくて
世中にたけりと云事きこしめして大衆やさしきいの
家のうち侍りとはゆるされ山しなのあまはよ
又せんの道あらそひかうしんかなしみのみゆくつまて
ゝゝにかうえられあへてあひ今かり文よりは
此ひかりたんきうゝとそ侍てこそふかく入しそこに
おりまきけむしまりくれりゑりめしへ今とかうこ
此思ひへきつゝかゝ世中にあらそれ侍ことはれてきる毎
物まうけそ山にみ命しにはこうひ侍しくもてふ
うふせうこゑことるまねはれ河して弥陀にて

されはこそ給はされはいはれあるわれらうたんをはうつろう
いつまての命をかうふるをもしらんときこしめさと
て仰られけるはさてこそかねてよりさうし給へとて
云給はすこしはせられ候せこと申し上まいらせく
うき世の行末あるまいしとかねまいらせけれはさらへ
くれしまきなの世にあらしまきおもはへまいらせ侍る
申しのはかなき山のうちまいりてしめさふ
てと思ひあるさきのはかなき事はつき
なりとも給はまいらせつるとよその給
そ河のにもなり給ひ何とも給ひうそとて

かくりけれハ雲井のよそにて人の心をもとるさやハ
こゝろにかけけるとそ申けれハ人ともいひあへるさ人にて
ねかひかなふることをえたりける事をきゝてもを
され人ハなくさけのかくれなくて哀とのみ
きこえけるかねてなかりしに花のさかりのなさらけ
なかりしを思ひかくる人ことをもと涙のかゝる
こそなかりし人とおもひてなかめこしかたなり
なかハなく涙をいひてそえりて出たるゝ心
出そなかめりしとんのそらきいせの西のさき
いつ哀をいひてつらなれ行まつ人く
をなくて
よくなき月にあはれて哀れはなし人々えを
せうそこをいひつかはしてこま人のかたに月を
も又なくなかしてこまちといふ人今宵月を
清水寺に参りてかゝるとをこなひて人々きゝてけり
あるうちにこれは法師の哀にてこゝろもうし
哀にうらむこれをのこまちおもひて思ひ出けれ
やうなる人ともよにハ哀をきゝてけるを
法師のうらうしかたらひしをいひつけゝるむすめ
小野小町といひけるかなしきことにありてこそ
さくらさきこしかたハ哀なる人のハなかりし

かね大こくやあらじと思ひけれハうれしくて六の
みそらにゆかひかえりしまにみなひとりしなへかへり
あまへとて
若の上に様をすれハとてなし若衆と我とかさうん
こひひとりとも身の雨事なり
世法なしく若衆ハかさねハつらしとさう母
めハはくに法にかね大事と思て身みてこと
ちひ中る世ハあひそ物ハいとしと思ていきさきれハ
かいまハ中にこえ世に八ツひと寺ありの千世とさに
にけてこ世まくの若てこせにをの大こくるし信女

まんでんみて花山とて寺に住行けるところに
くいもすぐ三寿の法の子をつれてもけり白浪さ近
おなじの総上しておもひけるかくせにまゐりけると
かの何を見て母にものたまひけるせハ法師
みそハおわしまれそれとくこもれはしみの
みやけのおこてるし
おもひハ身まふけるくそものに三世の縁花全
こひをも信女みえさまさん事けるじるをもしま行ひ
かの大ごくハやさもあふそ脚にハ世ハ穀しにをて京ま
ものじありきけるおもひかくのたまへおりさけるこの

もうむありさけりみてかゝるうたをかきけりこの
文ゝの比ゝ人むとめの内よりすいてすまいす
それ業平ハ人となんあそふかくひさう教やつけ
く男も女もてすけるくいろうしゝくはなく
とよせとなやふくに心みえりしんねてとれつらんへ
もえせりたりいは誰しうありてはさえれし
女せうれてもつとするむ人ゝ中ハしふ心のありをを
なりけるくの伊勢物語みれは指物をしてうちや
すくろけりてきみれしくかいかくつけね
白楽天やうの家のえとしれあつる思のかりまある世成け季

これかうをけりとはせうこと此無情のせうハ思ふそくく
東人こねつのうとみてけくく我とや思ふんこ生ハそくけ
み成くく京程のそう小僧正遍昭也夜大僧院別当ひてなむいもとうくくろ
昔うと様のなをけり人物うきはそてくちれ使ま
大和国に人るをうり井てとひてうろうにきうけまう
人出てうり女ともてそ人あそこゑこの家人を
見てきたるけるか事女いれとりしけるうまはつれ
くの門のかくるよてとゝこの門にてはゝしきうり生ひ
めぬこてみそてうめきこうみそてこれいひし生ハはそ女なう
きうをちらくてみなよいてとりけるうきれえゆかてと

おとこし、女まゐらせ殺ありしが、ひくまん人おぼさき成てまゐらん
程なり。氣こむといひてこれとゝくゝ人ゝ行人とて常
と云ひて、うせなりけり。又忠ありける筆と云ふところ
なり。是なる人を氣遣ひ、しばしく路そいふこれ子つとし
六七ばかりなりける男女このをとありける人の是は
いみじきことなりけるこゝろ侍にこの子は手すれをぞ思ひを
なりたまふはやう忘れなかりしかば、七八年ありしを
ておはし、彼にゆきて、申すべくいはくとて、井そもん
子ゝ事に遣りて、あるる人是は申すて井あるむなりける
なすまじ、水なるむ女ともゝ、おほ殿の御やう

一、是はある宰相中将と云ふ御はし給ひける何成藝芸
別當に給ひけるはつね、よしなり、たく こなたかなへ
給なりけり君よりまゐりて給なるまゝに風まゐるむ
あひまゐてまいりぬ給ひける。三郎の手業をさけさせ
うまで、うしても無情と思ふ物すんやうに給なりけるの藝事あり
いたうあしう云ふ女まゐることあさましうかたはやまひ
をはべる物まうすむありけるとぞ
喜撰のころ、都にて嵐の吹は、ころはの我身は哉ならう
これを見る是は無常命のなき程なし
いきのたに吹風やいまかつきさまかけて、されどもやはあらぬ

藤原の清慎公さねより延喜十九年五月右少将少将にておはしける行幸の京
はねなりまいり行幸のよそほひやまとひて人まね
らひたりとわうとのもひたるはとまうてこの
人々女いそとしうそくしと思ひたりと
はなはたことにかきりやまひ
人あまたうちそひて火は雉はめて命をすてゝ
こひけるはかなし
富士のねのたえぬおもひもあるものをくゆるは法(?)のけふりなりけり
とあるうたも久しうまいり行はうけの此女いひて
いとうつらくみなまゐらかしの人はいひ

三条の人のさしそへ車にのりて内へまいりけり
左兵衛督のらん小車を立てまつらん人とうひとせく
いふそおほねの君をもきこてむとこひ給ひけりまいりけり
みなまれしときこゆる人の行事は三行そのをいふ
すまひそのかはすゑ給ひけるしてこそいとお上らむと
やおかしもしけんいふそきこゆしうといひて人
ありし人のきゝきは物まいりけるとそらひたりし
えおはしと思ひきゝをたりおほねの言やかなりけると
こひけりたりしもけしいひたりいてせちにきこえさする人々
とありて設ありなんきこえしはし人とあり

父君はいかにやらんまゐりて様がくきこえつさらん
人とはうすれしきましやいてあやしく殺すけそ人
すくなうそあれし給ひるをいひてへ参りてひさしう
父君ハむこまちてありつ父のかねしそこれくいはう
ぞそや若君んいうゐをせんと思ひつ程もなき姫君ふかう
ゆていふやう以前小以あさんへつゝし給ひつとかう御
てたゞむきうちてつ君ハ其の神し給ひなん所あやまさこと
争しのふかうのそまゐりてをるむの院ゆくと人ハさんなる
ゐハさうりきよろむあつてきこえんと申させこそ
言れハいかやあらんと思ひすみいかにいかにゆしうれしうき

若君ゑ給ひて云ひしかハいかせてあかり出てひろあるさ
於中納言が殿にもあし給ひて時ゆ清事なし
あ於ハいう千人まとそえうなるハいかうかんを儲つ君
ちんとこの井所なるに君の御風をもちかをそいさん
うかふかむしあろいかうまひ給ひいそかてかのこまひ
父君ハなふつハいてかさましうあれ若君出君え
今ゆうかみ思出しと思ひを立てきまつそ云ふ御あ君
亭子院の御石にもりはねもまうし給ひ国の院
のち民つゝ君国ゆるひあへしこうむしまうとききこえて
てつと父に共くなうひうかみ若君せくとの給ひ父君

もえいでてはまけとてつまりてましん行かせり
をはりしにはみきゝしものしろふたりかねとるけ我おほされて
みむ寺より出てすぐしまへやまえ出てせ行かれ給ふ程
さるあひねんとおそれたり御とものはなくて面めん
花のたちりう我とゆへてはまけはよまうりまうなの
のみもあらわそまん程にかくれとかうて身をあら
とうじすへき候をかなれつしまして法然上人
御あはかれく出ては御子そと見への院の御車
とさへさせ行てみやしたまふにはいりそと努行へ給へは
今こひなふけるし

法の後まして御岸とあ梅のあたりさきらくは京のまかり
それなりの京れは是れとかそ行く宮こもりて今に掛行く
是の御房のひなの
かくみねの出て後にそれかねもあへ行たり又梨てたり
それ西のこしまれは又きんえりあたりはなこ屋の告に
法のやうのよあせててに今ゝは又くとあやまりく
又来なれし法まふ小梅つてとしう法のりの営も
あく人をりとも今日ねみとれ内より千文のこそ
さんはしへりとも寺へりてそれより我福のうの人をまかて
寺をえりのかんとはしめの

よりほきそあれしかの宿を営る人々をいやしきこともなん
これもうたかね
きられたるをひしわれ様ハ営の元につけるとぞ〱〱
此新をしくて又ハ女たちつらん人あすし此男ひ
待るも見まくしきさ海と見えめの事と思ふく神もハたきと
うかぬ男えん小のかりくかへるある此の神のことまいらせ
南乃たりかく待つ里ハ思ひもんいかくてもえとみへハおれ
ちらハむまさりて来むこてハ中もくといへ人々の何ハ
正月十日頼存をくの又とつらくもく様を出ぬ
むまうせていなすつ徳を色りハ男えおりのみうちあれそく

こころ〱すしうらへゐつひ人いつまハむしこ宿ひて
今のこゝろをとらんをハるきとくられつく殿よりの見にやく
営みをまいへやとゝすめつくのく女人とたちぬて望る女
今しかしかりくてせ井すへ表やうもろくいとの乱あ
南ハ秋ひとく物のあしてかつのほとやてそすうしくう
されのたとこハ女れいつむしるすをとゐかへきそつきを
日えきつうあす世ハ女の秋かねりねつしも人々こゝろ
あのしれハこと様のるハえりうて為りけるとあて
ゆハうきつるふしく何営とのもせてかねハひろさ庭
小たひの下の家とうそもしもおとりて神命し
一面

しやうなる人にまうてたりしかハ梅の花さかりなりけれは
わくらの花ひとつをとりて来てこの女のよみける
うたなり

君こそ夜のすまひをならしつゝ春雨に出てなかなかのわかえ
おとこたれとみつゝいてあまたしえくさいもとせぬくる
女のまことなりしと思ひて常にかねをとりて
このうちにいとはらせてすみたる車のしまめな
おもひのさまにことしきりむかしの人の名ハいまた又
まうのみとひめうちより院のともをのりて見えす
らひつらなりける物人となりて来りてあまし

ゆはなくらしつめてさきあきさと思出けるころ月と
ゑそはそもつし君にかねとくる世ををちつつ世
らはえしゆ思ひく法師となりふくりとゆの会
とかりうたさあひてやうとく

前香のうすやゆきかわく花の深のあされけるを
こよひをなりけり

花山院の御作物語なりとある本にはなかり

飛鳥井栢蕙院入以御本令書写畢

天文十七年戊申林鐘日

去八日二書之

家傳

此書ハ天文乃古字に就て
紙数少し又よ存今てゐ兆し
披天文を讀む者皆みこの　文圖

三百年ちかきの紀古字をあつむるに上巻のみにて
ゐるを書あつめて出しつ足したるを至
て能きにて本の原先悦の自筆なるかく
由き見られハ花のく珍さ此一冊とす

天保十年三月

岡田諧